

フジフィルム スクエア

2024年度

活動報告書



2025

FUJIFILM SQUARE

フジフィルム スクエアのこれまでの活動

開館以来、延べ1,800回以上の写真展を開催し、850万人以上の幅広い年代の方々にご来館いただいています※1。

※1 2024年3月時点



富士フィルムは創業以来「写真文化」を守り育てるため、写真の素晴らしさ、楽しさ、感動、そして写真を残す大切さを伝える活動を一貫して行ってきました。

1957 富士フォトサロン開館

プロ、アマチュアを問わず優れた作品を発表する場として、フジフィルム スクエアの前身となる富士フォトサロンを銀座に開館しました。

2007 フジフィルム スクエア開館

東京ミッドタウン(六本木)への本社移転と同時に、複合型ショールーム「フジフィルム スクエア」を開館しました。「富士フォトサロン」から改名した「富士フィルムフォトサロン」に加え、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」などを併設。



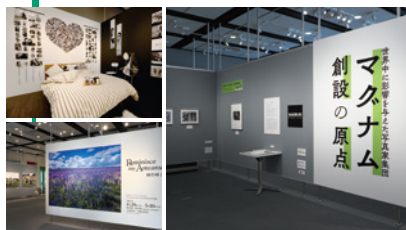
2014 フジフィルム・フォトコレクション収蔵

富士フィルムグループの創立80周年を機に、幕末・明治から現代に至る日本の写真史を飾る101人の写真家選りすぐりの一枚を、「フジフィルム・フォトコレクション」として収蔵。これらはフジフィルム スクエアをはじめ全国の美術館でも展示され、その芸術的価値をお伝えするとともに、日本写真史の体系的な理解に役立てていただいています。

2017 開館10周年記念写真展の開催

フジフィルム スクエアの開館10周年を記念し、写真の「歴史」・「今」・「明日」という3つのテーマで、「写真の過去・現在・未来」を発信する12の特別企画展を1年間にわたり開催しました。

10th
ANNIVERSARY



2018 メセナアワード2018 優秀賞「瞬間の芸術賞」受賞

フジフィルム スクエアの活動が、企業メセナ協議会※2が主催するメセナアワード2018 優秀賞「瞬間の芸術賞」を受賞。長年にわたり、写真作品を発表、鑑賞する場を提供し、人と人の心がつながる感動体験を広め、写真文化の普及と発展に貢献していること、時代を超える価値を持つ貴重な作品の展示機会を作り、記録性や芸術性という写真の本質を、時代に合った内容で発信し、写真を文化財として継承・育成する可能性を追求し続けていることを評価いただきました。

※2 企業による芸術文化支援(メセナ)活動の活性化を目的に1990年に設立された、日本で唯一のメセナ専門の中間支援機関

2024 フジフィルム・フォトコレクションII 収蔵

富士フィルムグループが創立90周年を迎えた2024年、「人を撮る」をテーマに20世紀の世界写真史に名を連ねる写真家20名によって撮影された53点の歴史的価値の高い作品を「フジフィルム・フォトコレクションII」として収蔵。2024年4月26日(金)～5月16日(木)フジフィルム スクエアにて初披露しました。今後、時代を超える価値を持つこれらの作品群を「フジフィルム・フォトコレクションII」として大切に保存するとともに、国内外で展示・公開していきます。

90th
そして
その先の
未来へ
100



「こころ彩るところ」フジフィルム スクエアは、
時代の変化に適した形で、写真文化を未来へと絶えず、守り育み続けます。



富士フィルムフォトサロン、写真歴史博物館、フジフィルム・フォトコレクション、若手写真家応援プロジェクトは、2025年、公益社団法人企業メセナ協議会より、「芸術・文化振興による社会創造活動」として「THIS IS MECENAT 2025」の認定を受けております。

施設コンセプト



「写真の持つ力に感動しました」「思わず私も撮りたくなりました」
訪れたお客さまから、そんなたくさんのお声をいただいています。

フジフイルム スクエアはこれからも、
価値ある作品との出会いを通じて、
人と人が心豊かにつながる場でありたいと考えています。

例えば、見応えあるオリジナルプリントを、思う存分鑑賞する。
出展者の、作品作りの背景や意図を理解する。
写真家の心に共感し、一緒に見ている人と気持ちを分かち合う。
歴代のカメラや写真の歴史を知り、好奇心の羽根を広げる。

この場所で生まれる出会いや感動で、お客さまの心が鮮やかに彩られ、
その体験が色褪せずに記憶に残ること。それがフジフイルム スクエアの願いです。
“ところ彩るところ”。私たちはこの言葉を胸に、
さまざまな活動を通じて写真の素晴らしさや楽しさ、
そして写真を残す大切さを伝え、写真文化の発展と心豊かな社会の実現に貢献していきます。

FUJIFILM SQUARE

ご挨拶

フジフィルム スクエアは、富士フィルム株式会社東京ミッドタウン（東京都港区）本社にある複合型ショールームです。優れた写真作品の展示を通じ、写真文化を守り育て、写真の持つ力を発信する場として、2007年にオープンいたしました。

さまざまなジャンルの写真を展示する写真ギャラリー「富士フィルムフォトサロン東京」、写真の歴史とカメラの進化を学べる「写真歴史博物館」、最新の写真関連商品を試せる「タッチフジフィルム&イメージングサービスカウンター」、化粧品・サプリメントなどの当社ヘルスケア商品を取り揃えた直営店「ASTALIFT 六本木」で構成されています。

開館以来、2024年度までに、延べ1,800回以上の写真展を開催。みずみずしい感性を持つ若手写真家、写真史に名を刻む巨匠など、国内外の幅広い層の写真家の皆さまの作品を発表・公開してまいりました。

こうした多彩な作品を展示し、開館以来累計で850万人以上の方々に写真鑑賞の場として親しんでいただいています。

富士フィルムグループが創立90周年を迎えた2024年は、二つの大企画展を開催いたしました。一つは「フジフィルム・フォトコレクションII 世界の20世紀写真『人を撮る』」です。富士フィルムホールディングス株式会社は、富士フィルムグループ創立80周年の際に、幕末・明治から現代に至る日本の写真史を飾る101名の写真家の選りすぐりの一枚を「フジフィルム・フォトコレクション」として収集。今回の90周年はそれに続き、「人を撮る」をテーマに20世紀の世界写真史に名を連ねる写真家20名の歴史的価値の高い作品を「フジフィルム・フォトコレクションII」として収集し、皆さまに鑑賞していただけるよう東京・大阪にて展示いたしました。もう一つは「写楽祭^{しゃらくさい}! — 日本の写真集 1950～70年代」です。『写楽祭』とは、富士写真フイルム株式会社（当時）が1960年代に刊行したPR誌です。本展では、『写楽祭』で特集された当時注目の写真集・写真家の作品を展示。写真史と共に歩んできた富士フィルムの軌跡を振り返りました。

また他にも、写真の新しい視点や表現をさらに豊かに発信する活動として、富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクトの「写真家たちの新しい物語^{*1}」と「ポートフォリオレビュー^{*2}/アワード」も継続開催いたしました。若手写真家に写真展示の専門的な知識や作品の発表の場を提供することで、彼らの創造性を引き出すことが、写真表現の新たな可能性や幅広い世代の共感を呼び起こす写真の力の発信につながっています。

富士フィルムグループは2024年、創立90周年を機にグループパーパス「地球上の笑顔の回数を増やしていく。」を制定しました。フジフィルム スクエアは、これからも富士フィルムの祖業である写真を通じて、感動の瞬間や大切な思い出を形に残し、お客さまに笑顔を届け、地球上の笑顔の回数を増やしていきます。

※1フジフィルム スクエアは2013年に、若手写真家が写真展を開催するための制作費などを支援する「写真家たちの新しい物語」を若手写真家応援プロジェクトの一つとして立ち上げ、2024年度までに計46回開催しています。

※2ポートフォリオレビュー:作品講評会

CONTENTS

企画写真展レポート

活動のハイライト

創立90周年を迎え、写真の文化と歴史を支えてきた 富士フィルムならではの展示を実施	・・・ 06
個性豊かな新世代の写真表現を育むアワードや、 新たな写真ファンを生み出す体感型企画に挑戦	・・・ 08

FUJIFILM SQUARE 企画写真展

01 富士フィルムグループ 創立90周年記念コレクション展 「フジフィルム・フォトコレクションⅡ」世界の20世紀写真「人を撮る」	・・・ 10
02 富士フィルムグループ 創立90周年記念 企画展 写楽祭(しゃらくさい)! ― 日本の写真集 1950～70年代	・・・ 12
03 中村征夫写真展「海中顔面大博覧会」	・・・ 14
04 夜空にかがやく星々の記憶 ～星空写真の世界へようこそ!～	・・・ 16
05 中谷吉隆写真展 「125年の絆―日本で活躍する中南米の日系人の今日―」・ 「蒼氓(そうぼう)60年―南米の日本人―」	・・・ 18
06 沖昌之写真展「これネコ それネコ?」	・・・ 19

富士フィルムグループ スポーツ企画展

07 富士フィルムホールディングス株式会社 企画写真展 富士フィルム・スタジオアリス女子オープン写真展 ～ワクワク、感動、みんなの笑顔。～	・・・ 20
08 富士フィルム海老名Minerva AFC 写真展	・・・ 21

富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト

[写真家たちの新しい物語]

09 丸井みのる写真展「Sense」 ― 心に重なる感覚～熊野にて ―	・・・ 21
10 竹見脩吾 トライアスロン報道写真展 「Triathlete(トライアスリート) ―限界のその先へ―」	・・・ 22
11 廣田比呂子写真展 「ハロー!ナマステ!こんにちは!」 ― 最高に幸せになれるインド ―	・・・ 23
12 茂野優太写真展「THE SOUTHERN LIMIT of DRIFT ICE」 流氷がやってくる最南端の海	・・・ 24
13 平井佑之介写真展「いのちの旅 ―ふるさとの川をめざすサケ―」 ―東北の川でいとなまれる生命の物語―	・・・ 25

富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト

[写真家たちの新しい物語]

14 吉岡泰良写真展 「Boundary(バウンダリー) ―クリケットから広がる世界―」	・・・ 26
15 黒岩正和写真展「島魂」 ―TOUKON―	・・・ 27
16 Pedro Gomes写真展「The Art of Surf Photography」	・・・ 28

[ポートフォリオレビュー／アワード 2024]

17 ポートフォリオレビュー／アワード 2024	・・・ 29
--------------------------	--------

富士フィルム 企画写真展

18 GFX Challenge Grant Program 2023 ～Make Your Next Great Image～	・・・ 32
19 富士フィルム・グリーンファンダ 40周年企画 第2弾「公益信託を通じた富士フィルムの自然環境保護・保全活動」	・・・ 34

当社協力写真展

20 日蘭協会70周年記念写真展 ～会員たちが見た日蘭の物語～	・・・ 34
---------------------------------	--------

富士フィルム 企画写真展

21 写真家Ivan Joshua Loh主催 「世界中のXシリーズ愛好家による写真展」	・・・ 35
22 VR PHOTO EXHIBITION Vol.3	・・・ 36
KG+ Discovery Award 2024 受賞作品 青木弘写真展 23 「JUHEISEN 樹平線」～中央アフリカ共和国より愛を込めて～	・・・ 37

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展

24 アンセル・アダムス作品展「ポートフォリオⅣ:偉大なる啓示」	・・・ 36
25 有田泰而(ありたたいじ)「First Born」 ― 家族と遊ぶ時間(とき) ―	・・・ 37
26 ロベール・ドアノー写真展 第一部「パリ郊外 ～城壁の外側～」／ 第二部「"永遠の3秒"の原点」	・・・ 38
27 立木義浩写真展 「舌出し天使 CONTACT SHEETS - 眼差しの軌跡 -」	・・・ 39

写真展開催リスト

当社が主催・協力する企画展38本(若手写真家応援プロジェクト8本、写真歴史博物館の企画写真展5本含む)、公募展42本、合計80本

施設概要レポート

創立90周年を迎え、写真の文化と歴史を支え

富士フィルムが収集した、世界写真史に名を刻む写真家たちの作品を公開

富士フィルムグループ 創立90周年記念コレクション展 『フジフィルム・フォトコレクションII』世界の20世紀写真「人を撮る」



富士フィルムホールディングスは、2024年1月に富士フィルムグループが創立90周年を迎えたことを記念して、「写真文化を守る」という基本理念のもと、20世紀の写真史に名を連ねる著名な海外写真家が「人を撮った」名作・傑作のオリジナルプリントを収集しました。そして2024年4月、

極めて貴重なその全作品を、フジフィルム スクエアで初披露しました。

本展は、近代写真の父と呼ばれるアルフレッド・スティーグリッツ、フォト・ジャーナリストとして活躍したW.ユージン・スマイス、ポートレートの巨匠ユー・サフ・カーシュのほか、アウグスト・ザンダー、ウォーカー・エヴァンズなど、世界写真史を代表する20名の全53点を展示。創業以来、写真文化の発展を支えてきた富士フィルムがその信頼のもとに、世界の名作・傑作を収集してその価値を守り、無償で公開することの意義は、広く共感を集めました。会期初日の内覧会ではメディア、写真家・写真団体、美術館関係者など約130人に出席いただき、本展図録に寄稿いただいた日本写真芸術学会 会長の高橋則英氏による講演を行いました。会期中の来館者は24,000人を超えるなど、極めて注目度の高い写真展となりました。



「フジフィルム・フォトコレクション」とは

富士フィルムホールディングスは、富士フィルムグループの創立80周年に当たる2014年に、幕末・明治から現代に至る日本の写真史を飾る、101名の写真家選りすぐりの一枚を収集。これら101枚の作品を「フジフィルム・フォトコレクション」として、フジフィルム スクエアや全国の美術館など20カ所以上で展示し、20万人を超える方々に写真の芸術的価値を伝えました。今回はそれに続く第2弾として、視野を国内から世界に広げ、20世紀の写真史に名を連ねた海外の著名写真家による「人を撮った」名作・傑作を収集した至高のコレクションです。富士フィルムでは、全コレクション作品を未来へと残すべく大切に保存するとともに、広く公開していきます。

稀有な日本の写真集文化に再注目。往年の独創的な表現を現代に



富士フィルムグループ 創立90周年記念 企画展 写楽祭! — 日本の写真集 1950～70年代

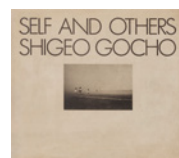
本展は、富士写真フイルム株式会社(当時)が1960年代に刊行していたPR誌『写楽祭』で紹介された著名な写真家の写真集15冊と、同時代を語るには欠かせない写真集17冊の計32冊を、各作家の写真作品と合わせて一堂に展示した、「写真集」が主役の展覧会です。

高度経済成長期の日本では、カメラの普及や印刷技術の発展、才能ある写真家たちとデザイナーや編集者などの出会いが相まって、世界でも稀有な「写真集文化」が生まれました。フィルムやカメラを通じて写真文化を支えてきた富士フィルムグループは、その一方で、写真集の印刷に使われる刷版などの資材も提供してきました。今回の展覧会は、写真と印刷の両方に携わってきた富士フィルムグループの創立90周年にふさわしい企画展となりました。



木村伊兵衛

左:「秋田おばこ 秋田・大曲」
1953年
右:「木村伊兵衛傑作写真集」
(朝日新聞社、1954)



牛腸茂雄

左:「SELF AND OTHERS」より
1977年
右:「SELF AND OTHERS」
(白亜館、1977)



1960年代に刊行されたPR誌『写楽祭』

写真文化の普及を目的に発行され、ユーモアと遊び心で彩られたレイアウトと斬新なデザインで、写真を撮る高揚感や楽しさが今日でも新鮮に感じられる冊子となっています。1964年には、富士写真フイルム創立30周年を記念し、32人の写真家の写真集を紹介した「写楽祭傑作写真集」を発行。木村伊兵衛、土門拳といった戦後の写真界を代表する巨匠はもちろん、現在では語られる機会の少ない写真家の作品も含まれ、写真史を読み直す上でも大変興味深い特集号です。今回の写真展では、ここから「フジフィルム・フォトコレクション」の収蔵作家を中心に15冊の写真集を展示しました。

てきた富士フィルムならではの展示を実施

90th
そして
その先の
100

写真史を代表する巨匠の希少なオリジナルプリントを展示

アンセル・亚当ス作品展 「ポートフォリオIV:偉大なる啓示」

理論と技術に裏打ちされた究極的に美しい銀塩写真作品を多数制作し、写真の芸術的価値を高めた20世紀写真の巨匠、アンセル・亚当ス。彼が遺した最高傑作の一つとされるのが、1963年に亚当ス自身がプリントまで制作し、260部限定で出版された作品集「ポートフォリオIV:偉大なる啓示」です。今回、富士フィルムが所蔵している大変希少価値の高い作品集を、富士フィルムグループ創立90周年の記念企画として展示しました。

「ポートフォリオIV」は、亚当ス自身が米国の数々の自然風景を撮影し、作品を選定、さらにプリントも制作した15点が収められた作品集です。亚当スはその作品群で、自然の中にある美と崇高さをモノクロームの階調で見事に表現しています。今回の展示で、亚当スが究極の写真表現を追求して生み出した、60年以上前のオリジナルプリントに触れた方々からの反響は大きく、写真が持つ表現の力を改めて体感いただくことができました。



190年を超える写真技術の変遷を、歴史的なカメラ・写真の展示や、写真事業に長年携わった元社員コンシェルジュの解説で紹介



写真歴史博物館

フジフィルム スクエアの「写真歴史博物館」では、写真の原点となった機材のレプリカや秘蔵のアンティークカメラ、富士フィルムの歴史に残るカメラなどを展示しています。



コンシェルジュツアー

富士フィルムで写真関連製品・サービスの研究、技術開発やサポートに長年携わった元社員がコンシェルジュとして写真展や展示物について分かりやすく解説。写真の歴史や進化について説明するツアーも行い、多くの方に好評をいただいています。

日本とオランダ70年の文化交流の歴史を写真で回顧

日蘭協会70周年記念写真展 ～ 会員たちが見た日蘭の物語 ～

日本とオランダ両国の友好親善関係の増進に寄与することを目的に、1912(大正元)年に発足した日蘭協会は、第二次世界大戦中の活動中止後、1954(昭和29)年に再発足して2024(令和6)年に70周年を迎えました。これを記念して、両国の文化や友好の歴史を会員や一般の方々に知っていただきたいという、本協会の会長を務める富士フィルム 代表取締役社長・CEO 後藤禎一の思いから、本写真展を開催しました。会員の企業・個人の皆さまから応募された写真152点に加え、協会役員として活躍された銀行員のハンス・ブリンクマン氏が昭和20～30年代に撮影した日本の風景写真6点も展示。両国の文化交流の歴史を振り返りました。



個性豊かな新世代の写真表現を育むアワードや、

多くの若手写真家にプロの写真家の講評を受ける機会を、
受賞者にはさらなる対話で作品を磨き、写真展を開催する機会を提供

【富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト】
ポートフォリオレビュー/アワード 2024

富士フィルムでは「若手写真家応援プロジェクト」の一環として、「ポートフォリオレビュー/アワード」を実施しています。これは、45歳以下の若手写真家の作品を公募して、プロの写真家の講評（レビュー）を受ける機会を提供し、さらに4名の受賞者に写真展開催へ向けた指導や作品制作費を支援する企画で、2024年度で3回目となります。



48名の作品をプロの写真家がレビューし、4名の受賞者を決定

書類・作品での一次選考を通過した48名に対し、プロの写真家4名がレビュー（講評する講師）としてオンラインで作品を講評。撮影や写真の選び方などのアドバイス提供後、二次選考でファイナリスト12名を選出。レビューが12名と対面し、前回レビューを基にブラッシュアップされた作品を講評した上で、最終的にアワード受賞者4名を選出しました。

4名の写真展開催に向け、プロの写真家が数カ月かけて指導

各受賞者をレビューが二人三脚で指導。写真展のコンセプトから作品構成、展示レイアウトや解説文・展示物の制作、銀写真プリントの色、表現などについて対話を重ねることで、受賞者は作品のオリジナリティを磨き、大きく成長していきました。熱いレビューやクリエイティブな対話の様子は、公式Webサイトにて動画で公開しています。



受賞者紹介・プロセス動画



写真展開催・レビューとのギャラリートークを実施

受賞者4名は東京で3週間、大阪で2週間の写真展を開催。自らの作品や創作意図について語る「ギャラリートーク」への登壇、会場でのお客さまとの対話などからも写真展を開催することの醍醐味を学び、他の受賞者の作品にも刺激を受けて、新たな創作への着想を得ていました。

新しい感性を持つ写真家の支援と、写真文化への若い世代の
興味喚起を目指したプロジェクトは、多彩な8企画を開催

【富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト】
「写真家たちの新しい物語」



©竹見脩吾



©茂野優太



同じく「若手写真家応援プロジェクト」の一つである「写真家たちの新しい物語」は、2013年から毎年実施している企画です。45歳以下の写真家から作品を募集し、審査を通過した方々の写真展開催を全面的に支援するもので、2024年度は8名の個展を開催しました。

今年度は、サーフィン、トライアスロンやクリケットなどのスポーツにおける普段見られない多彩なシーンや、知床の流氷の海、鮭が遡上する東北の川、熊野の山や森で見られる命の循環に、新鮮な感性で迫った写真展が注目されました。また、活気あふれる祭りに表れる日本の島々の“魂”を捉えた作品、インドの自由な日常を生き生きと写し取った作品など、国内外の文化を独自の視点で捉えた写真展も開催。幅広い年代・国籍の方々に来館いただきました。



©平井佑之介

新たな写真ファンを生み出す体感型企画に挑戦

全世界から選ばれた精鋭クリエイターの創作の核心を、
大迫力の銀写真プリントやWebのメイキング動画で発信

GFX Challenge Grant Program 2023
～Make Your Next Great Image～



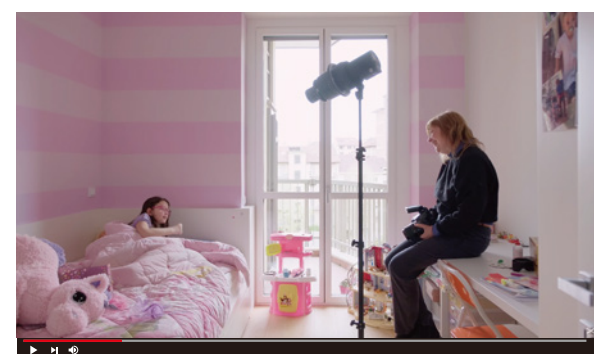
世界各地のクリエイターによる創作の支援と、作品を発表する場の提供を目的に富士フィルムが2021年から主催している助成金プログラム「GFX Challenge Grant Program」。3回目となった今回も、独創的な写真・映像作品15テーマがさまざまな国籍の

外部審査員5名により選出され、当社は制作活動の支援として、総額10万ドル相当の助成金の提供と「ラージフォーマット デジタルカメラシステム GFX」の無償貸与を行いました。

そして、写真家・ビデオグラファー・映画監督など、多彩な受賞者が半年をかけて完成させた作品を、臨場感あふれる銀写真プリントやモニターで一堂に展示。社会・文化・人間について深く掘り下げたり、音楽を組み合わせたりと、見る人に新たな視点を与える作品ばかりで、多くの来館者に高く評価されました。なお、各受賞者の革新的な創作過程に迫ったメイキング映像は、公式Webサイトで公開しています。また、受賞者のうち11名が来日し、審査員による対面での作品レビューやクリエイター同士の交流も実現しました。



受賞者によるメイキング映像



SDGsや自然の大切さを実感できる美しい写真と
楽しく学べるワークショップで、子どもたちを笑顔に!

夜空にかがやく星々の記憶
～星空写真の世界へようこそ!～



毎年夏にフジフィルム スクエアが取り組んでいる小・中学生の自由研究応援企画として、2024年は見て、学んで、楽しい星空の写真展を開催しました。天の川の大パノラマや、88星座の写真、宇宙望遠鏡が鮮明に捉えた星々などを、大迫力の銀写真プリントで展示。解説パネルや配布物も充実させ、星の基礎知識や最新の天文観測技術といった専門的な情報を分かりやすく紹介。また、宇宙の不思議や、星がきれいに見られる環境についても考えてもらえる内容を盛り込みました。天体望遠鏡を手作りするワークショップや、富士フィルムの双眼鏡による星空観望会も開催し、子どもたちは目を輝かせて楽しんでいました。



中村征夫写真展「海中顔面大博覧会」



子どもから大人まで生物や自然環境に関心を持つきっかけとしていただく企画の一つとして、水中写真の第一人者・中村征夫氏の「海中顔面大博覧会」を開催しました。色彩豊かな海の生き物のユニークな「顔面」や海底の景色、そして、中村氏が添えたユーモラスで示唆に富んだタイトルと解説をご覧になった来館者は、思わず笑顔に。また、半世紀にわたって世界各地の海に潜り海中を捉え続けてきた中村氏のギャラリートークと記念トークイベントを通じ、海の環境への深い気づきも得られる写真展になりました。



富士フィルムグループ 創立90周年記念コレクション展
『フジフィルム・フォトコレクションⅡ』世界の20世紀写真「人を撮る」

2024年4月26日(金)～5月16日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2

Exhibition to Commemorate 90 Years of Fujifilm Group

FUJIFILM
PHOTO COLLECTION II

Capturing the Human Experience:
World Photography in the 20th Century



富士フィルムグループ 創立90周年記念コレクション展
フジフィルム・フォトコレクションⅡ
世界の20世紀写真「人を撮る」

2024.4.26 fri - 5.16 thu
10時～19時(初日は11時から、最終日は14時まで、入館は終了10分前まで)
会期中無休・入館無料

主催：富士フィルム株式会社 後援：港区教育委員会
企画・制作：フォトクラシック

© Elliott Erwitt / Magnum Photos / AFLO | © Henri Cartier-Bresson / Magnum Photos / AFLO | © 1946, 2024 The Heirs of W. Eugene Smith | © Yousof Karsh / Camera Press / AFLO | Photographs by August Sander | © Steve McCurry / Magnum Photos / AFLO | © Martin Parr / Magnum Photos / AFLO

FUJIFILM SQUARE

出展写真家

アンセル・アダムス、マヌエル・アルバレス・ブラボ、ハリー・キャラハン、アンリ・カルティエ・ブレッソン、イモージン・カニンガム、ブルース・デヴィッドソン、エリオット・アーウィット、ウォーカー・エヴァンズ、エメット・ゴウウィン、石元泰博、ユースフ・カーシュ、ジャック・アンリ・ラルティエ、スティーヴ・マッカリー、アーノルド・ニューマン、マーティン・パー、セバスチャン・サルガド、アウグスト・ザンダー、W. ユージン・スミス、アルフレッド・スティーグリッツ、エドワード・ウェストン(全20作家)

展示作品点数

53点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画／制作：株式会社フォトクラシック
デザイン：脇野直人

販売物

『フジフィルム・フォトコレクションⅡ』図録

展示概要

富士フィルムグループの創立90周年を記念して富士フィルムホールディングスが新たに収集した「フジフィルム・フォトコレクションⅡ」を初披露した写真展です。本コレクションは、10年前の「フジフィルム・フォトコレクション」に続き、「写真文化を守る」という一貫した基本理念のもと、視野を国内から世界に広げて、20世紀の写真史に名を連ねる著名な海外写真家の名作・傑作のオリジナルプリントを収集したものです。

コレクションのテーマは「人を撮る」。人物写真はいわば写真の原点であり、写真術発展における最大の動機でもありました。さまざまな技法が進化を続けた歴史の中で、人物写真は常に人々の関心の中心であり続けてきました。「人を撮る」ことは、写真の歴史の中で最も身近であるとともに最も特別なものでもあり、写真の普遍的なテーマといえます。

今回収集したのは、20世紀を代表する海外写真家20名の53点。作品の真價はもちろんのこと、プリントのクオリティや希少性など、社外有識者による厳格な評価を経て、いずれも高い価値を持つオリジナルプリントとして認められた作品ばかりです。

内容・質ともに国内外の美術館の収蔵作品に匹敵する極めて貴重な作品群を「フジフィルム・フォトコレクションⅡ」として大切に保存するとともに、多くの方々に鑑賞いただき、写真文化の維持・発展に貢献したい——今回の写真展は、当社のそうした思いと決意を伝える大切な機会となりました。なお、本展の後、富士フィルムフォトサロン 大阪でも全作品をそろえた同様の写真展を開催しました。



主要メディア掲載

新聞：朝日新聞(5月4日)、読売新聞夕刊(5月7日)、中日新聞夕刊(5月8日)、電化新聞(5月20日)／Web：msnニュース、ライブドアニュース、朝日新聞デジタル、いこーよ

来館者数

合計24,583人(21日間)

20世紀を代表する作家の思いが込められた「本物」だけが持つ力を感じ取り、「人」とは、「生きる」とは何かに思いをはせる

本展の開催に当たっては、歴史的価値・プリントのクオリティともに高い作品を、一般の方から専門家まで幅広い方々に堪能していただける写真展を目指しました。展示会場では、市井の人から誰もが知る歴史の人物まで、当時確かにそこに存在していた人々の息吹が感じられるシンプルな構成・レイアウトに。あえて詳しい作品解説パネルを掲示せず、鑑賞者に「本物」の写真だけが持つ力を感じ、「人」とは何か、「生きる」とは何かということに思いをはせていただける展示としました。

一方、本展を見て作品や作家に関心を持った方々により深く理解していただけるよう、詳細な情報を掲載した図録も制作。全編を日本語・英語併記とし、広く海外の方にも「フジフィルム・フォトコレクションⅡ」の全貌と意義を知っていただけるような内容となっています。なお、本図録はデザインと印刷品質が評価され、一般社団法人日本グラフィックサービス工業会が主催する「ジャグラー作品展」において「東京都産業労働局長賞」を受賞しました。



展示された全作家と作品について詳細に解説した図録も制作・販売



国内外から24,000人以上が来場
“奇跡のコレクション”と絶賛の声も

本展初日の午前には内覧会を実施。報道関係者をはじめ写真業界や美術館関係者など約130人の方々にお越しいただきました。皆さまからは、感動と希望を人々に与える写真の力や、写真文化の発展・継承に努める当社の取り組みに対する共感と賛同の声が寄せられました。

会期中には国内では九州や北海道などの遠方から、また海外からのお客さまを含めて、24,000人超の方が来館。一枚一枚の写真を熱心に見つめながら、作品の背後に込められたストーリーを読み取ろうとする来館者の姿は、本物の写真が持つ「伝える力」を、あらためて感じさせるものでした。館内アンケートでは会期中の来館者の98%が「また来たい」と答え、“奇跡のコレクション”と絶賛されるなど、大きな反響をいただきました。

《来館者の声》

生きているうちにこれだけの素晴らしい作品を一挙に見ることができるとは、本当に驚き、感動しました。

心から感動しました。この有名な作家たちの素晴らしい、美術品ともいえるプリントを目の前で見ることができて、涙が出ました。これほどの作品を見る機会はないだろうと思います。

写真マニアはもちろん、写真に詳しくない人にも、優れた作品は心に刺さるものがあり、1点1点の表現力に引き込まれました。写真の真価を再び思い起こさせてくれる素晴らしい展示でした。

よくぞこれだけの名作を集めましたね。いずれも息をのむようなインパクトがある写真ばかり。世界的写真家の愛が伝わり涙してしまう作品もありました。

人間が生きた姿が美しく残されていました。共感や驚き、写真がこんなにも語りかけてくる感覚を初めて味わいました。

非常に見応えがあり、富士フィルムでないとできない写真展だと思いました。

印刷で見ていた有名な作品がオリジナルプリントでは印象が全く異なり、被写体の人柄や撮影時の雰囲気、肌の質感や匂いまで伝わってくるようで素晴らしいです。

富士フイルムグループ 創立90周年記念 企画展

しゃらくさい

写楽祭! — 日本の写真集 1950～70年代

2024年10月18日(金)～11月7日(木)

富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー

富士フイルムグループ 創立 90 周年記念 企画展

写楽祭!

SHYARAKUSAI

【日本の写真集 1950～70年代】

写真集の写真展

2024.10.18[金]—11.7[木]

富士フイルムフォトサロン 東京

10:00-19:00(最終日は14:00まで、入館は終了30分前まで)

入館無料・会期中無休

FUJIFILM SQUARE

展示作品点数	
写真集:32冊、プリント:32点	
クレジット	
主催:富士フイルム株式会社	企画:株式会社コンタクト
協力:写真集食堂めぐたま	デザイン:長尾敦子
後援:港区教育委員会	プリント制作:プロラボ クリエイト
監修:写真評論家 飯沢耕太郎	

併催イベント	
・「写楽祭」開催記念トークイベント(お話:飯沢耕太郎氏、聞き手:コンタクト 佐藤正子氏) 2024年11月3日(日・祝) 13:30～15:00	
・ギャラリートーク(お話:飯沢耕太郎氏、聞き手:コンタクト 佐藤正子氏) 2024年10月19日(土)・26日(土) 13:00～ ※各回約30分	
・写真展出展作品の図録「写楽祭」(B6判、非売品)を毎日先着500冊限定で配布。 ※開催期間中	

展示概要

富士フイルムグループ創立90周年を記念して、日本の近現代写真史の豊穡期といえる1950～70年代に焦点を当て、代表的な写真集と各作家の写真作品を一堂に展示した展覧会です。写真評論家・飯沢耕太郎氏を監修に迎え、プリント表現の多様性を直接感じられる「写真展」と、時代を超えて作品を広く伝え続ける「写真集」を対にして展示する構成としました。

タイトルにある「写楽祭」とは、1960年代に富士写真フイルム株式会社(当時)が刊行していた有料PR誌の名前です。同誌は、高度経済成長期のカメラブームを背景に、人々に写真を撮る楽しさを伝え、写真文化の普及を図ることを目的としていました。1964年には、富士写真フイルム創立30周年記念として、32人の写真家による32冊の写真集を紹介した『写楽祭傑作写真集』を発行。当時から代表する写真家と才能あるデザイナーや編集者との出会い、印刷技術の発展により花開いた「写真集文化」に迫っています。

今回の展覧会は2部構成。第1部では『写楽祭傑作写真集』で取り上げられた写真集から15冊を精選し、写真集の実物と各作家の写真作品を合わせて展示しました。第2部では「写真集の時代 1950～70年代」のタイトルのもと、『写楽祭』には掲載されていないながら同時代を語るには欠かせない17冊の写真集を厳選。第1部と同様に、各作家の写真作品とともに紹介しました。第1部・第2部合わせて32冊の写真集により、日本の写真文化の振興において写真集が果たした大きな役割を俯瞰できる展覧会となりました。

出展写真家

第1部:「写楽祭傑作写真集」(15冊)

木村伊兵衛「木村伊兵衛傑作写真集」(朝日新聞社、1954)、大竹省二「世界の音楽家」(朝日新聞社、1955)、中村立行「ヌード 撮影とその実技」(玄光社、1955)、濱谷浩「裏日本」(新潮社、1957)、丹野章「ポリショイ劇場」(音楽之友社、1958)、石元泰博「ある日ある所」(芸美出版社、1958)、岡田紅陽「富士」(明文堂、1959)、細江英公「おとこと女」(カメラアート社、1961)、秋山庄太郎「おんな・おとこ・ヨーロッパ」(文藝春秋新社、1961)、東松照明／土門拳「hiroshima-nagasaki document 1961」(原水爆禁止日本協議会、1961)、島田護介「雪国」(暮らしの手帖社、1962)、渡辺義雄「伊勢」(朝日新聞社、1962)、中村由信「日本の海女」(東京中日新聞出版部、1962)、岩宮武二「かたち」(美術出版社、1962)、緑川洋一「瀬戸内海」(美術出版社、1962)

第2部:「写真集の時代 1950～70年代」(17冊)

田淵行男「田淵行男 山岳写真傑作集」(朝日新聞社、1951)、山端庸介「記録写真原爆の長崎」(第一出版社、1952)、常盤とよ子「危険な毒花」(三笠書房、1957)、芳賀日出男「田の神」(平凡社、1959)、土門拳「筑豊のこどもたち」(パトリア書店、1960)、山沢栄子「遠近」(未来社、1962)、小島一郎「津軽」(小島一郎:写真、石坂洋次郎:編、新潮社、1963)、川田喜久治「地図」(美術出版社、1965)、浅井慎平「ビートルズ東京」(中部日本放送、1966)、渡辺眸「新宿コンテンツラリー」(渡辺眸写真集刊行会、1968)、深瀬昌久「映像の現代④ 遊戯」(中央公論社、1971)、森山大道「映像の現代⑩ 狩人」(中央公論社、1972)、鈴木清「流れの歌」(私家版、1972)、沢渡朔「nadia 森の人形館」(毎日新聞社、1973)、奈良原一高「消滅した時間」(朝日新聞社、1975)、牛腸茂雄「SELF AND OTHERS」(白亜館、1977)、石内都「絶唱、横須賀ストーリー」(写真通信社、1979)

主要メディア掲載

新聞:朝日新聞夕刊(東京、10月22日)／Web:朝日新聞デジタルマガジン&[and]、@DIME、CREA WEB、JBpress、東洋経済オンライン、NIKKEI COMPASS、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル

来館者数

合計22,804人(21日間)

時代と写真文化を俯瞰する写真家たちの写真集とプリントが一堂に



本展の最大の特徴は、「写真集」に焦点を当てた展覧会であることです。さまざまな写真家による写真展は現在も盛んに開催されていますし、単体の写真集は書店や図書館で見ることができます。しかし、多くの写真集を集めて時代の流れを俯瞰し、展覧会を通じて写真文化を振り返るという機会はあまりありません。

今回の会場では、作家ごとに写真集と代表的な写真作品のプリントをセットで展示。写真集は表紙など本体のほか、中面の一部ページが分かるようにも工夫し、当時の写真集制作にかけられた熱量を感じていただけるようにしました。

展示プリント32点のうち20点は、富士フイルムグループ創立80周年を機に日本の写真史を飾る優れた写真を集めた「フジフイルム・フォトコレクション」の収蔵作品です。また、PR誌「写楽祭」の第1号～第10号も展示するなど、富士フイルムグループが写真文化の発展・継承に果たしてきた役割も知っていただく機会となりました。

1950～70年代の写真表現の面白さや時代背景に迫るトークショー也大盛況

会期中、11月3日(日・祝)には、「写楽祭」開催記念イベントとしてフジフイルム スクエア 2F特設会場で、本展を監修いただいた写真評論家の飯沢耕太郎氏と、本展企画に関わっていただいた株式会社コンタクトの佐藤正子氏によるトークショーを開催し、会場は百数十人のお客さまで満席に。約90分にわたり、本展の企画の発端となったPR誌『写楽祭』の概要や、写真をめぐる当時の時代背景の説明、今回取り上げた写真家・写真集にまつわるエピソードや解説など、展示だけでは分からない興味深いお話をじっくりと聞くことができました。

また、10月19日(土)・26日(土)には、同じ飯沢氏・佐藤氏による約30分のギャラリートークも開催。多くの来館者がお二人を取り囲むように集まり、実際の写真集や写真作品を前にしての解説に、熱心に耳を傾けていました。



「写真集の展覧会」が来館者の関心を呼び、海外の方からも大きな反響

3週間の会期中、先生に勧められたという写真学校の学生さんから、若い頃に見た懐かしい写真集をもう一度見たかったという年配の方まで、数多くの来館者に日本近代写真史の豊穡期の熱気を感じていただきました。また、優れた作家たちの作品をこれだけ集め展示したことに、海外から訪れたプロの写真家の方が感嘆するなど、外国人来館者の方々からも高い評価を受けました。

写真集は、写真家だけでなく、デザイナーや編集者、ライターなど多くの人の共同作業で出来上がるものです。写真がデジタル化され、気軽にSNSに上げられ消費されていく時代だからこそ、本展は多くの来館者に写真集の価値を見直していただくよい機会となりました。



本展特製の「写楽祭」冊子を来館者に無料配布

《来館者の声》

いろいろな作家が新たな「写真表現」を模索し、工夫していた時代の作品を見ることができる貴重な機会でした。

そうそうたる大写真家の作品ばかりで、一枚一枚に力強さを感じました。

写真だけでなく、当時の実際の写真集も見られたのは貴重な体験でした。当時の生活・風俗が見えるような素直な写真がたくさんありました。

まだ写真を今ほど気軽に撮ることができなかった時代に、『写楽祭』という冊子を発行して写真の楽しさ、面白さを広げようとした心意気に感銘を受けました。

日本の写真文化の黎明期の作品が見られる価値ある展覧会で、とてもよかったです!

日本の写真家たちの生きざまを強く感じられました。

中村征夫写真展「海中顔面大博覧会」

2024年6月14日(金)～7月4日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・ミニギャラリー



展示作品点数
104点

クレジット
主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画協力／デザイン：クレヴィス
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント
・中村征夫氏によるトークイベント(ゲスト：石川真紀氏(フリーアナウンサー))
2024年7月1日(月) 18:30～20:00
・中村征夫氏によるギャラリートーク
2024年6月15日(土)・16日(日)・22日(土)・23日(日)・29日(土)・30日(日)
14:00～14:30

展示概要

水中写真の第一人者として知られる中村征夫氏は、1945年に秋田県で生まれ、19歳のとき神奈川県真鶴岬で水中写真を独学で始めました。1977年、初めて東京湾に潜り、ヘドロの海でたくましく生きる生き物に感動して以来、東京湾定点観測をライフワークとしてきました。数々の報道現場の経験を生かし、新聞、テレビ、ラジオ、講演会とさまざまなメディアを通して海の魅力や海をめぐる人々の営みを伝えています。

中村氏を一躍有名にしたのが、1987年に発表して大ヒットした写真展・写真集「海中顔面博覧会」でした。それから30余年、カメラもフィルムからデジタルへと変わる中で、世界各地の海に潜り撮り続けてきた「顔面」写真の続編として新作を集大成したのが、今回の「海中顔面大博覧会」です。

水深わずか数十センチの海辺から大洋へと広がる雄大で多様な海には、見れば見るほど、色彩豊かでデザイン的にも秀作ぞろいな生き物たちが暮らすユニークな楽園(社会)が存在します。本展「海中顔面大博覧会」では、そうした生き物が一瞬だけ見せてくれた豊かな表情や、見れば思わずほほ笑んでしまうしぐさなどを捉えた写真104点を展示。その1点1点に、中村氏がユーモアあふれるタイトルと解説を添えました。

中村氏は、海の問題に深い関心を寄せており、今回も環境問題への気づきを与える作品も展示しつつ、来館者が楽しい生き物たちの姿に触れて笑顔になり、海に関心を持っていただける構成としました。



販売物
・中村征夫写真集「海中顔面大博覧会」(クレヴィス)
・写真絵本『あっぱっぱ』(福音館書店)
・写真絵本『あっちむいてほい』(福音館書店)
・ポストカード(6種)、トートバッグ(2種)、Tシャツ(3種)

主要メディア掲載
新聞：秋田魁新報(6月23日)、毎日新聞(6月23日)／その他雑誌：週刊文春(5月30日)／ラジオ：Tokyo Midtown presents The Lifestyle MUSEUM(6月28日)／Web：JBpress、東洋経済オンライン、PR TIMES、PRESIDENT Online、読売新聞オンライン、MdN、Yahoo!ニュース、47NEWS、毎日新聞デジタル

来館者数
合計20,830人(21日間)

海中に潜む意外な「顔面」との出会いを
中村氏のユーモアあふれるタイトルで
楽しく追体験

海に潜るたびにユーモラスな被写体を探すという中村氏。今回の写真展の大きな特徴の一つは、それらの作品に添えられた、中村氏自身によるタイトルや解説でした。例えば、真っ白な顔に見えるウニの殻の写真には「美白パック中」、海底に沈んだ飲料の空き缶から顔をのぞかせた魚の写真には「ステイホーム」などのタイトルが添えられました。

思わずクスッと笑えるこうしたタイトルは、撮影時に中村氏の頭にふと浮かんだもの。いわば写真と一対で作品をなしています。写真展では通常、作品の下方にキャプションが配置されますが、今回はタイトルや解説が読みやすくなるよう、写真の真横に縦書きで配置するなど、見せ方も工夫しました。

今回の「海中顔面大博覧会」は、同名の写真集の発行とタイミングを合わせて開催したもので、会場では出版社が用意した写真集やポストカードなどのグッズの販売も行いました。中村氏自身もほぼ毎日在廊され、写真集にサインをするなど来館者と大いに交流されました。会期終了後には、中村氏から「自分の集大成となる写真展を、フジフィルム スクエアで無事開催できてうれしい」というコメントもいただきました。



展示した全作品の「顔面」をタイトルや解説文とともに楽しめるリーフレットを会場で無料配布



トークイベントは増席が必要になるほどの人気
撮影の臨場感を伝える機材の展示も好評



魚好きの子どもから、前作の「海中顔面博覧会」以来のファンという年配者まで多くの方々が訪れる中、写真作品以外に注目を集めていたのは、中村氏が実際に使っている総重量60kgのカメラ機材です。水中ではカメラが軽すぎると浮いて扱いにくいことから重くなければならぬと知った来館者は、見るからに重そうなカメラの迫力に、水中撮影の難しさを実感していました。

会期中の土日には計6回、ギャラリートークを開催。また、7月1日のトークイベントには平日の夕刻にもかかわらず定員を大幅に超える200人以上の参加申し込みがあり、増席して対応する人気ぶりでした。スクリーンに投影されるユーモラスな作品と、ダイビング好きのフリーアナウンサー石川真紀氏との軽妙なトークで、会場は笑いに包まれていました。



《来館者の声》

中村さんご本人とお話しでき、また大きなパネルで写真を拝見できてうれしい限りでした。ユニークな生物を見つけたときの喜びがタイトルに表れていて楽しかったです。

本当に歌っているように見えたり、怒っているように見えたり、海の生き物たちのさまざまな表情が見られて楽しかったです!!

写真が素晴らしく、キャプションを読むのもすごく楽しかったです。特に、日本語がまだそれほど読めない外国人として、英訳もあってさらに楽しい経験になりました。

大変素晴らしい作品に感動です! キャプションもウィットに富み、面白かったです。海と生物たちへの中村さんの愛を感じます。

海の生物に顔面から出会うという体験は初めて。どの生き物にも個性があってチャミングで愛らしく、彼らにも暮らしや物語があるのだなと、親近感がわきました。

トークを聞いて作品への驚きが倍になりました。中村さんが海の中で2時間、静かに、頭の中であれこれ会話しながら待っている様子を想像しながら見ました。

夜空にかがやく星々の記憶 ～星空写真の世界へようこそ!～

2024年7月26日(金)～8月15日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー



出展写真家

上田優紀、榎本司、荻原誠、菊池真以、木村琢磨、高砂淳二、田村梨貴、恒松泰至、中西敏貴、成澤広幸、沼澤茂美、橋向真、東山正宜、藤原嘉騎、松本紀生、茂手木秀行、山下雅也、山下峰冬(五十首順・敬称略)

展示作品点数

121点

フレジット

主催:富士フィルム株式会社
後援:港区教育委員会、大阪市教育委員会、胎内星まつり2024(新潟県胎内市)
監修:沼澤茂美(天体写真家、天文イラストレーター)
企画協力/デザイン:デジタルカメラマガジン編集部
プリント制作:プロラボ クリエイト

併催イベント

- ・ワークショップ「天体望遠鏡を作ってみよう!」(講師:菊池真以氏(気象予報士))
2024年7月27日(土) 13:30～15:00
- ・トークイベント「星の声を聴いてみよう!」(講師:沼澤茂美氏(天体写真家、天文イラストレーター))
2024年7月28日(日) 13:30～15:00
- ・観望会&ギャラリートーク「都会の月や星空を見てみよう!」(講師:東山正宜(写真家) 上田優紀(写真家))
2024年8月10日(土) 18:30～20:30
- ・来館記念プレゼント「解いてみよう! 星空クロスワードパズル」
展示期間中、会場にてメッセージを記入してくださった方に、自由研究用リーフレット「解いてみよう! 星空クロスワードパズル」をプレゼント。さらに、7月27日(土)・28日(日)は、パズルに正解された先着50名の方に特製缶バッジをプレゼント。

展示概要

毎年夏休みの時期にフジフィルム スクエアが実施している、小・中学生の自由研究を応援する企画として、2024年は、幅広い世代に人気の星空写真を集めた写真展を開催しました。

今回の特徴の一つは、全体監修を務めた天体写真家・天文イラストレーターの沼澤茂美氏をはじめ、17名という多数の写真家の作品を集めたことです。同じ「星空写真」でも、天の川の大パノラマ作品、国際天文学連合が策定した88星座の写真、最新の宇宙望遠鏡で捉えた星々の姿など、さまざま。撮影地も国内外にわたり、大自然の中から都会の夜空まで幅広い作品が展覧されました。また会場では、美しい写真だけでなく、星に関する基礎知識や星座にまつわる神話などの雑学、星空の撮り方のテクニックなども紹介。さらに、夏休み自由研究イベント「見て学べる! 星空のふしぎ」として、ワークショップ、トークイベント、富士フィルムの双眼鏡を用いた観望会&ギャラリートークも同時開催しました。

星空の魅力を学びながら、星がきれいに見られる空と周辺環境について考えることは、SDGsの取り組み*にも通じます。本展が来館者にとってそのきっかけとなることを願って、多様な切り口で楽しんでいただける写真展としました。

*本展の開催趣旨は、目標4「質の高い教育をみんなに」、目標13「気候変動に具体的な対策を」、目標15「陸の豊かさも守ろう」の取り組みに通じるものです。



販売物

- ・『紫金山・アトラス彗星完全ガイド』(インプレス)
- ・『夜の絶景写真 星空風景編』(インプレス)
- ・『DEEP ALASKA』(インプレス)
- ・『図解で分かる名所の撮り方』(インプレス)
- ・デジタルカメラマガジン2024年8月号(インプレス)

主要メディア掲載

新聞:毎日新聞夕刊(7月23日) / Web:朝日新聞デジタルマガジン&[and]、@DIME、iza、CREA WEB、JBpress、東洋経済オンライン、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、読売新聞オンライン、Yahoo!ニュース

来館者数

合計19,747人(21日間)

自然の絶景で見る星空、都会を彩る星空など、さまざまな星空写真で子どもから大人まで魅了

本展は、学校の夏休み期間であったことや、開催情報を港区の小・中学校に告知していたことも相まって、連日多くの子どもたちでにぎわいました。もちろん、子どもだけではなく、星空に興味を持つ幅広い年代の方々に来館いただきました。

会場は「星空の世界」と「宇宙の魅力」の2つのコーナーで構成しました。「星空の世界」は、国内外の雄大な自然の中に輝く夜空の星や、星が描くアートショー、都会から見える星空など、バラエティー豊かな美しい写真ばかり。「宇宙の魅力」のコーナーでは、写真に加えて「驚異の天体ショーと夏の星空」と題したムービーも上映しました。

今回展示した作品は、大きいもので1,000×1,500mmサイズまでの121点。描写性が高い銀写真プリントならではの迫力の星空を、息をのんで細部まで熱心に観察する子どもたちの姿が、会場のあちこちで見られました。

また、作品に添えた解説パネルは、専門用語を用いながらも分かりやすさに配慮して



ギャラリートークの様子。左が上田氏、右が東山氏

記載しており、科学博物館レベルの内容が無料で学べると好評。アンケートでは、本展を目的に訪れた来館者の93%が「また来たい」と答えるなど、全世代の方々に、見て、学んで、楽しんでいただくことができました。

星空や地球環境についての子どもの学びを、ワークショップや観望会でサポート

併催した夏休み自由研究イベントは、事前の申し込み多数で抽選による参加となるなど、いずれも大人気でした。

お菓子の筒や虫メガネなど身近な材料で簡単に天体望遠鏡を作るワークショップは特に人気が高く、保護者の方に見守られながら真剣にカッターやテープを使って望遠鏡を組み立てる子どもの姿が印象的でした。後日、実際に作った望遠鏡で月を観察しスケッチしたものを、夏休みの自由研究として提出したというエピソードもお寄せいただきました。

東京ミッドタウンのミッドタウン・ガーデンで開催した観望会では、当社の手持ちタイプのフジノン双眼鏡を貸し出して、子どもたちと月を観察。また、当社の大型双眼鏡を設置し、東京の中心で美しい星空を眺める体験ができることに驚きの声が上がるなど、大好評でした。



《来館者の声》

何気なく見ていた空が、実はこんなにたくさんの星であふれていることに驚き、自分も星の中の1つに住んでいることに感動しました。写真とは信じられないくらい美しかったです。

自分もカメラで星空撮影に挑戦したくなりました。六本木で撮られた写真もあり、東京でも撮れることに驚きました。

星について詳しくなれました! どの写真も背景がきれいで、空を見上げるきっかけになりました。東京で自分の目では見られない星を写真で見ることができてよかったです!

どの作品も星がきれいに撮れていて、色が鮮やかでびっくりしました。写真家の星に対する思いや感動が美しい写真になっているように感じました。

意外に知らない星の雑学を得ることができ、また、肉眼で見ることができない星を見せてもらえて楽しかったです。

夏休みの自由研究で星座のことを調べていたので、写真展を見て参考になりました。

写真だけなのに、こんなに「すごい!」と思ったのは、初めてでした。僕もこれをきっかけに、夜空の星にもっと注目してみようと思います。



トークイベントでは沼澤氏が講師に



中谷吉隆写真展「125年の絆—日本で活躍する中南米の日系人の今日—」・「蒼氓60年—南米の日本人—」

2024年10月4日(金)～10月17日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2・3

「蒼氓60年」同時開催
—南米の日本人—
1964年の貴重なモノクロプリント約120点を展示いたします。
※開催期間・時間は「125年の絆」と同じです。

入館無料
会期中無休
ADMISSION FREE
OPEN EVERYDAY

125年の絆

— KIZUNA — THE BOND OF OVER 125 YEARS



2022～24年にわたり、新たに取材した銀写真プリント約100点を展示します。

中谷吉隆 写真展

■ 尺八奏者としてフジテレビに出演した日本記者が南米の多種多様な文化を捉え、モノクロとカラーの両方で伝える。

2024.10.4(金) - 10.17(木)

■ 時間 / 10:00-19:00 (最終日は16:00まで、入館は終了10分前まで)
■ 会場 / 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2・3
■ 主催 / 富士フィルム株式会社 ■ 後援 / 港区教育委員会
■ 企画協力 / 国際協力機構横浜センター (JICA横浜)、写真家 池本さやか (コーディネーター)

FUJIFILM SQUARE

1937年生まれの中谷吉隆氏は、報道写真を中心に幅広い分野で長く活躍してきました。1963年、移民の集団帰国の新聞記事に心動かれ、単身で中南米に渡航、移民開始から約60年を経ている日系の人々と日系社会を取材。翌1964年、その成果を富士フォトサロン(当時銀座)で「蒼氓60年—南米の日本人—」として発表しました。

それからさらに60年。国際協力機構 横浜センター (JICA横浜) の全面協力のもと、2022年から2年にわたり日本国内や世界を舞台に活躍する中南米の日系の人々20人以上を新たに取材し、ポートレートや職場での姿、家族や仲間とのつながりの様子などを紹介したのが本展です。併せて、「蒼氓60年—南米の日本人—」の作品も展示しました。60年前に南米で撮影し、当時展示した黒白プリント101点と、デジタルカメラによる最新のカラープリント103点の対比が印象的となった本展は、移民の歴史や多文化共生社会について伝える機会にもなりました。

会期中は、被写体となった方や日本の中南米日系人コミュニティの方も多く来館。また、普段あまり日系人の姿に接する機会がなかった来館者から、カメラが捉えたさまざまな舞台で生き生きと活躍するその姿に、驚きと感銘の声が寄せられました。

展示作品点数

204点

クレジット

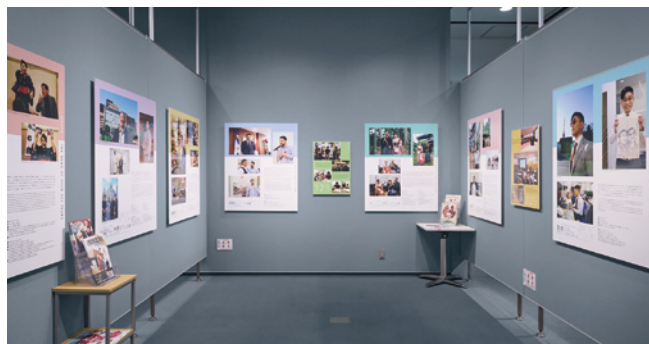
主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画協力：国際協力機構横浜センター (JICA横浜)、
写真家 池本さやか (コーディネーター)
デザイン：中村 晃
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・ 中谷吉隆氏によるギャラリートーク
2024年10月5日(土)・6日(日)・12日(土)・13日(日) 13:00～13:30

来館者数

合計15,005人(14日間)



来館者の声

私自身は日系ブラジル2世なので、写真を見ながら亡き父の話を思い出ししました。日本人にもっと移民のことを知って、在日日系人のことを理解してほしいです。

60年も前に記録した風景や日系の人々の働く様子を、保存し、時機を得て写真展で現代の人に明らかにすることを可能にしている、こういうお仕事の意味の大きさに感動しました。

深く考えさせられる写真を共有してくださる中谷さんに感謝します。語られた物語を見て、私自身が移民として共感でき、うれしく思っています。

沖昌之写真展「これネコ それネコ?」

2025年2月21日(金)～3月6日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



展示作品点数

44点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画協力：デジタルカメラマガジン編集部
デザイン：山下リサ (niwa no niwa)
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・ 沖昌之氏によるギャラリートーク
2025年2月22日(土)・23日(日・祝)・24日(月・振休)・3月1日(土)・2日(日)
14:00～ ※各回約30分

販売物

『これネコ それネコ?』(インプレス)

人気の猫写真家・沖昌之氏が約2年の歳月をかけて撮りためてきた新作44点を初公開した写真展です。沖氏は、たくさんの猫たちが暮らす各地の島などに滞在し、夜明けから日没までカメラを携え、猫たちをなでたり、それぞれの性格や行動、関係性を観察したりしながら、じっくりと撮影。動きをコントロールすることなく、“普段のその子らしい自由な姿”を捉えた膨大な写真の中から、思わず二度見してしまう、笑ってしまう瞬間を収めた作品を厳選しました。

展示では、個性ある猫たちの様子を階調豊かに表現した大サイズの銀写真プリントに加えて、躍動する猫たちの驚きの姿やユニークな表情を切り抜いた立体パネルを、彼らが遊び回っているかのように至るところに飾るなど、従来の写真展にはない遊び心あふれる構成にも挑戦。通りがかりに大きな猫のパネルが目にとまり立ち寄ったという方や、沖氏のファンの方々が会場は連日にぎわい、計5回行われたギャラリートークは、各回とも会場いっぱいのお客さまの熱気に包まれました。来館者一人ひとりと笑いを交えながら熱心に語り合う沖氏の姿も印象的でした。



来館者数

合計17,723人(14日間)

来館者の声

とても楽しい写真とトークに、大変盛り上がりました。「写真はその時を切り取るので見る人の想像力を刺激する」という沖さんに共感し、写真の素晴らしさを再認識しました。

猫がこんな表情をするのか! という驚きや、クスッと笑ってしまう癒やしをいただける素敵な空間でした。

猫の形に切り抜いた写真、大迫力の大きな写真など隙間なくぎゅっと展示され、臨場感たっぷりでした! 子どもから大人まで楽しめる展示でよかったです。

07 富士フィルムホールディングス株式会社 企画写真展 富士フィルム・スタジオアリス女子オープン写真展 ～ワクワク、感動、みんなの笑顔。～

2024年7月5日(金)～7月25日(木)

富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



本展では、2024年4月に石坂ゴルフ倶楽部を舞台に開催された「富士フィルム・スタジオアリス女子オープン 2024」の3日間の熱戦を写真で振り返りました。会場には、大会を盛り上げた女子プロゴルファーたちのプレー、最終ホールまで繰り広げられた阿部末悠選手と佐久間朱莉選手の優勝争い、そして、選手たちの笑顔の写真51点を展示。さらに、同大会で初優勝を飾り、カメラ・写真撮影が趣味である阿部末悠選手にご協力いただき、活動拠点の北海道で彼女が撮影した野生動物の写真も披露されました。緊迫感あふれるプレーの瞬間を切り取った写真はもちろんのこと、決戦後のグリーン上でお互いを称え合う阿部選手と佐久間選手の姿にも、多くの来館者が笑顔で見入っていました。

展示作品点数

51点+番組映像「“好き”を仕事にする世界線～日本女子プロゴルフ新時代～」(5月3日/読売テレビ)

クレジット

主催：富士フィルムホールディングス株式会社
企画協力/デザイン：株式会社インプレス
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計20,274人(21日間)



08 富士フィルム海老名Minerva AFC 写真展

2025年1月17日(金)～2月6日(木)

富士フィルムフォトサロン 東京 ミニギャラリー



富士フィルム海老名Minerva AFCは、1989年に旧富士ゼロックス株式会社(現：富士フィルムビジネスソリューション株式会社)有志にて設立し、35周年を迎えた社会人アメリカンフットボールクラブチームです。本展は、スポーツカメラマンの小座野容斉氏が、国内最高峰リーグ「X1 Super」に昇格した2024年の同チームの挑戦を捉えた作品を展示。平日は仕事をしながら、週末はフットボールに取り組む選手たちによる真剣勝負を、銀写真プリントで余すことなく伝えました。会場にチームへの応援メッセージを書き込むフラッグを用意したところ、献身的なプレーや仕事と試合を両立していることなどについて、温かな声を多数いただきました。一人ひとりが役割を分業し、高度な戦略のもと1プレー1プレーが実行されるアメリカンフットボールの魅力も感じていただける写真展となりました。

展示作品点数

25点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
共催：一般社団法人海老名Minerva AFC
企画/デザイン：株式会社ラジアン
プリント制作：プロラボ クリエイト

来館者数

合計20,064人(21日間)



【写真家たちの新しい物語】丸井みのる写真展 「Sense」 — 心に重なる感覚～熊野にて —

2024年3月29日(金)～4月18日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



三重県熊野市に15年以上在住し、林業雑誌・書籍の編集業や熊野のPRパンフレット制作などを行う丸井みのる氏は、日々自宅近くの森や海を歩いて肌で感じ、見て触れた「感覚:Sense」を大切に写真に収めてきました。

本展は、温暖かつ降水量の多い熊野の地で、土地が持つ再生力を感じながら、巡る季節を何度も迎えてきたという丸井氏が、草木の芽吹きから朽ちるまでの変化を捉えた写真を展示しました。その作品群は、森や海が何気ない瞬間に見せるまばゆい光や、春に新芽を出すシダ、毎年同じ場所に咲くユリなど、小さな自然の美しさを見つけた喜びが伝わってくるものばかり。木々や海辺の風景の中に、丸井氏の手やご家族の姿が写るなど、自然と人との近さを感じさせる作品も多く、会場は作品を通して、水の滴の音や風にたなびく草木の匂いが感じられるような空間となりました。感じ入ったように作品を見つめる来館者が多く、中には何度も鑑賞に訪れているという方もいらっしゃいました。館内アンケートで98%の方が「また来たい」と回答するなど、本展は多くの方の心に響きました。

展示作品点数

30点

クレジット

主催:富士フィルム株式会社
後援:港区教育委員会
企画/デザイン:長尾敦子
プリント制作:プロラボ クリエイト

併催イベント

・丸井みのる氏によるギャラリートーク
2024年4月12日(金)
15:00～/17:00～
2024年4月14日(日)
13:00～/15:00～

来館者数

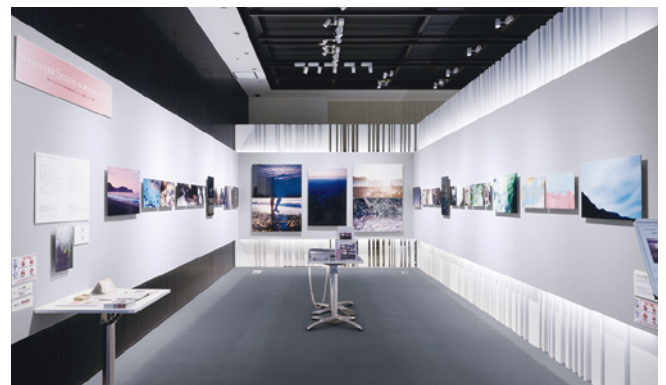
合計19,193人(21日間)

来館者の声

会期の初めの頃に写真展を拝見して、写真家の方に来て話が聞きたいと思い、再び訪れました。お話ができてよかったです。

作品に心ひかれて、3回目に来てしまいました。

トークイベントで丸井さんがなぜ写真を撮っていて、どんな気持ちで作品と向き合っているのかを話されていて、とても興味深く、30分では短いかったです。



出展者の声

自分の作品を選んでいただき、写真展を開催させていただいたことは、人生においてかけがえない経験と学びになりました。長年一人で取り組んでいた作品に対して、関係者の皆さまに展示に向けて客観的なご意見をいただいたおかげで、来館する方に伝わる展示になったのだと感じています。ギャラリートークにも思っていた以上に多くの方に集まっていただき、うれしかったです。展示作品を購入したいという方や、開催後、私の作風を生かして撮影してほしいとご依頼いただく機会にも恵まれ、感謝の気持ちでいっぱいです。

【写真家たちの新しい物語】竹見脩吾トライアスロン報道写真展 「Triathlete —限界のその先へ—」

2024年5月31日(金)ー6月13日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



スポーツフォトグラファーの竹見脩吾氏にとって、撮影が最も過酷であると同時に、スポーツの魅力を感じるという競技がトライアスロンです。本展は、60以上の競技を撮影してきた竹見氏が、テーマをトライアスロンに絞って開催した初の企画です。

公益社団法人日本トライアスロン連合オフィシャルカメラマンも務める竹見氏の視点で、10年にわたり日本各地の大会でトップ選手からキッズやシニアまでを捉えた作品を展示。天候で変化する自然環境と交わりながら、選手同士で駆け引きしつつ己と闘うトライアスロンの魅力を、圧倒的な表現力で伝えました。嵐の中、海に飛び込む選手の姿や、鍛え上げられた体を彩る光と影、喜怒哀楽の表情、壮絶な闘いで限界を超えながらゴール後に互いを称え合う場面など、素晴らしい瞬間を収めた作品の数々に、多くの来館者が胸を熱くしていました。

トライアスロンに触れる機会の少ない一般の方々に加え、競技に出場している選手も多数来場。竹見氏によるトークイベントでは撮影時の選手たちのドラマも披露され、会場は大いに沸き立ちました。本展は来館者の92%が「また来たい」と答えるなど、幅広い方々にご満足いただいた写真展となりました。

展示作品点数

39点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：公益社団法人日本トライアスロン連合 (JTU)、ワイズロード お茶の水エアロロード・トライアスロン館
後援：港区教育委員会
企画／デザイン：株式会社ラジアン
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・竹見脩吾氏によるギャラリートーク
2024年6月1日(土)・2日(日)・8日(土)・9日(日) 15:00～ ※各回約30分

来館者数

合計13,163人(14日間)



来館者の声

作品から伝わる圧倒的な躍動感、写真の繊細さ、感情の交差が伝わってくる表現力が素晴らしいかったです。

写真家になった経緯やトライアスロンとの出会いなどのお話も興味深かったです。

スポーツの迫力に感動しました。

出展者の声

本展開催にあたり、大変大きな反響をいただきました。トライアスロンの審判や選手の方々から撮影許可をいただけることが多くなり、より迫力のある写真を撮影する機会をいただいています。学生時代からの夢の舞台だった歴史ある会場で、多くの方々の支えを受け、写真展を作り上げられたことは、とても貴重な体験となりました。写真が好きな方が集まるこの場所で、撮影方法について足を止めてご質問くださる方が多かったこともうれしかったです。

【写真家たちの新しい物語】 廣田比呂子写真展

「ハロー! ナマステ! こんにちは!」 — 最高に幸せになれるインド —

2024年6月14日(金)～7月4日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

インドを歩いていると、好奇心だったり、何か売ろうとしてきたり、初対面とは思えない距離感でいろいろな人が声をかけてくる。世界1位の人口14億人を誇るこの国の全員を“チェキ™”で撮れたら面白いのではないかな——。写真家・廣田比呂子氏は、2012年以来、何度もインドを訪れる中で、ふと抱いたそんな思いから、ガンジス川流域を中心に巡礼者や観光客、土地ごとの生活などを撮影してきました。

本展では、高級コンパクトデジタルカメラ「FUJIFILM X100V」で捉えたガンジス川流域の風景の鮮やかな色彩や、ハイブリッドインスタントカメラ“チェキ”「instax mini Evo™」で軽やかに写し出した人々のポートレートを通じて、廣田氏が感じたインドの「自由」と「日常」を紹介しました。

廣田氏は会期中ほぼ毎日在廊し、来館者にインドの魅力などを語っていました。また、本展にインドからの観光客の方が偶然立ち寄り、その方の口コミをきっかけに何人ものインドの方が来館したり、ギャラリートークに廣田氏の外国人の写真仲間が訪れたり、本展は国籍を問わずさまざまな方にご覧いただくことができました。

展示作品点数

22点+チェキプリント™240点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：合同会社PCT

デザイン：廣田順
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・廣田比呂子氏によるギャラリートーク(ゲスト：村上仁一氏(PCT/雑誌「写真」編集長))
2024年6月15日(土)・29日(土) 13:00～ ※各回約30分

販売物

写真集「Serquyosh」(赤々舎)

来館者数

合計20,830人(21日間)

来館者の声

インドの日常を感じられる風景が見られて楽しかったです。

インドに行ったことはありませんが、興味深い写真ばかりで楽しむことができました。

明るい雰囲気のあるインドの写真がよかったです。



出展者の声

フジフィルム スクエアでの写真展開催によって、自分の作品を多くの方に見ていただき、さまざまな意見や感想を伺えたことは、貴重な経験でした。自分の作品に自信を持つことができ、堂々と「写真家です」と名乗れるようになりました。ギャラリートークは緊張しましたが、実際に登壇してみると皆さんが興味津々で質問してくださるので、自分の作品について掘り下げて話すことができました。また、写真展開催後にはラジオ出演やインドでの撮影の依頼をいただくなど、仕事の幅を広げるきっかけとなりました。

【写真家たちの新しい物語】茂野優太写真展

「THE SOUTHERN LIMIT of DRIFT ICE」 流氷がやってくる最南端の海

2024年7月12日(金)ー7月25日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2

富士フィルムフォトサロン 若手写真家応援プロジェクト
写真家たちの新しい物語

「東京展」 [会期中無休]
2024年 7月12日(金)ー7月25日(木)
10:00ー19:00 (最終日は16:00まで/入館は終了10分前まで)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2

「大阪展」 [会期中無休]
2024年 10月18日(金)ー10月31日(木)
10:00ー19:00 (10月24日(木)、31日(木)は14:00まで/入館は終了10分前まで)
富士フィルムフォトサロン 大阪 スペース1

「札幌展」 [会期中無休]
2024年 11月22日(金)ー11月27日(木)
10:00ー18:00
富士フィルムフォトサロン 札幌

THE 茂野優太写真展
SOUTHERN LIMIT of DRIFT ICE 流氷がやってくる最南端の海

世界各国の海を訪れ、写真・映像・文章などさまざまな手段で海の魅力を伝える水中写真家・茂野優太氏。本展では、茂野氏が年来のテーマとしている、流氷が漂着する知床の海の世界を捉えた作品を、繊細な色表現と見応えのある大サイズの銀写真プリントで展示しました。

気温-10℃・水温-1.0℃を下回り、全てのものが一瞬で凍る極限の世界。流氷で頭上を閉鎖された水中環境や、潜水機材・カメラの凍結トラブルなど、極寒期のオホーツクの水中撮影は、日本で最も過酷な撮影シーンの1つといえます。茂野氏は、そのような環境でしか見られない生き物たちの命の循環や、自然が作り出す芸術のような美しさとともに、地球温暖化などの影響で流氷が危機に瀕している現実を作品で訴えました。流氷が見られる世界最南端に位置する知床の海は、世界で最初に流氷が消失し得る場所でもあります。

大きな流氷から小さな生き物まで、今までに見たことがない流氷の海の光景は、来館者の心を引きつけ、流氷が日本にやってくることの大切さも伝えました。計5回開催されたギャラリートークには毎回大勢の方が参加するなど、会場は会期中を通じてにぎわっていました。

展示作品点数

40点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画／デザイン：株式会社日本写真企画
(写真雑誌「フォトコン」編集部)
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・茂野優太氏によるギャラリートーク
2024年7月12日(金)・13日(土)・
14日(日)・20日(土)・21日(日)
15:00～ ※各回約30分
7月12日(金)ゲスト：『フォトコン』編集長
藤森邦晃氏

販売物

・ポストカード(3枚セット)・Aプリント作品

来館者数

合計13,863人(14日間)

来館者の声

見ることでできない世界を知ることができる素晴らしい写真でした。

過酷な環境の中で撮影された流氷の写真はどれもきれいで美しかったです。

流氷の下の海の風景が宇宙みたいに美しかったです。



右側が茂野氏

出展者の声

本展を通じ、作品のまとめ方や見せ方について多くを学びました。展示の準備にあたり、企画・運営担当の方々と作品選定から一緒に考えました。そのような「写真のプロ」から客観的に作品を見ていただき、さまざまなアドバイスをいただいたことで、自分の強みや伝えたい世界が明確になったこと、そこから「自分の言葉」を持てたことが本当によかったです。会場の限られた空間で、どのような色味やサイズでプリントして作品を見せるか——撮影後にも「表現」は続くことを学び、今までよりさらに写真が好きになりました。

【写真家たちの新しい物語】平井佑之介写真展

「いのちの旅 ーふるさとの川をめざすサケー」ー東北の川でいとなまれる生命の物語ー

2024年8月23日(金)ー9月12日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

大学で動物行動学を学んだ後、さまざまな生き物たちの姿を伝え、人と動物、そして自然が共に暮らせるきっかけを作りたいと写真家を志した平井佑之介氏。伴侶動物であるイヌやネコからイルカやビーバーなどの野生動物まで幅広く撮影しています。

東日本大震災後の2014年秋、岩手県のある川で水しぶきを上げて遡上するサケの姿に心を動かされた平井氏は、以来約10年間、東北の川で生まれ、4年後に再び故郷の川へ戻ってくるサケの生態を取材し続けてきました。本展では、氏が秋から春先まで冷たい川に潜るなどして撮影した貴重な作品を、銀写真プリントでサケを実寸大まで大きくするなど臨場感ある展示で披露。自然や環境問題について考えるきっかけも来館者に提供しました。

会場では、若年層からシニア層まで幅広い方々が訪れる中、じっと作品を見つめる子どもたちの様子が特に印象的でした。海外からの来館者も多く、平井氏から英語で説明を受けながら写真を鑑賞する姿も見られました。アンケートでは本展を目的に訪れた方の約98%が「また来たい」と答えるなど、見る人の心を確実に捉えた写真展となりました。

展示作品点数

18点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：株式会社文一総合出版、
みちのくダイビング リアス
後援：港区教育委員会
企画：高橋佐智子 (Shishmaref)
デザイン：富沢祐次
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

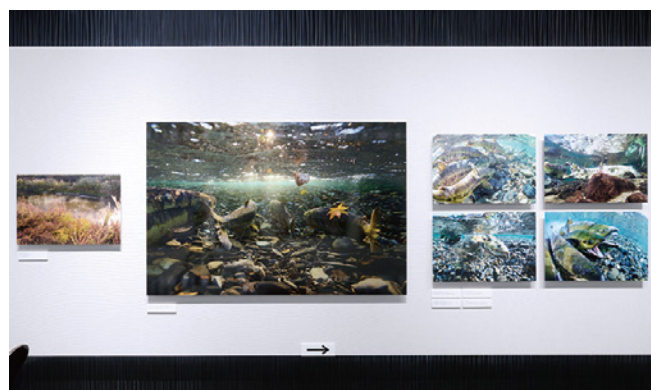
・平井佑之介氏によるギャラリートーク
2024年8月23日(金)・24日(土)・
25日(日)・30日(金)・31日(土)・
9月1日(日)・6日(金)・7日(土)・8日(日)
15:00～ ※各回約30分

販売物

写真集「ふるさとの川をめざすサケの旅」
(文一総合出版)

来館者数

合計21,574人(21日間)



来館者の声

写真を通して、大自然からの力を感じました。大変充実した時間を過ごさせて
いただきました。

鮭の写真と平井さんのトークを通して、地球上の生命が引き継がれていく
すごさを改めて認識させられると同時に、未来への危機感も感じました。

鮭の写真に自然の力強さを感じられて、心に響きました。

出展者の声

フジフィルム スクエアでの写真展開催という夢がかなっただけでなく、お客さまとコミュニケーションを取り、皆さんの表情を見ることができる貴重な機会をいただきました。「サケが4年後に故郷の川に帰ってくることだけで感動する」という声に、自分が初めてシャッターを切りたいと思った気持ちがよみがえるようでした。サケの故郷である東北出身の方々から励ましの言葉もいただき、「この瞬間のために取材を続けてきたのだ」と思うほど充実した3週間でした。この経験を生かし「いのちの旅」を続け、生き物と向き合っていきます。

【写真家たちの新しい物語】吉岡泰良写真展 「Boundary ークリケットから広がる世界ー」

2024年10月18日(金)ー11月7日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

富士フィルムフォトサロン
若手写真家応援プロジェクト
【写真家たちの新しい物語】

吉岡泰良写真展
Boundary
クリケットから広がる世界

2024.10.18 Fri ー 11.7 Thu 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

10:00ー19:00
会期中無休・入館無料
(最終日は18:00まで/入館は終了10分前まで)

スポーツの多様なシーンを10年近く撮り続けてきた吉岡泰良氏。本展では日本のクリケットを主題に、躍動する選手や競技の魅力を捉えた写真と、フィールドを囲む情景を伝える写真を組み合わせることで、クリケットの多様な側面を映し出し、見る人の想像力をかき立てました。

幼少期から引っ越しが多かった吉岡氏にとって、他者との境界を越えて打ち解けるきっかけをくれたのがスポーツです。中でも大学時代にプレーしたことを通じて親しんできたクリケットの撮影を数多く重ねました。フィールドが広いクリケットの撮影には望遠レンズが不可欠で、吉岡氏はできるだけ選手と近い距離で撮影。あるとき、観客席で少年と選手が並んで観戦する様子を目にし、自身が少年時代に境界を越えた経験と重なったことから、フィールド内外で人が織りなすシーンにカメラを向けるようになりました。吉岡氏が捉えた多様なドラマは、スポーツ写真ファンのみならず、それ以外も含めた幅広い来館者の共感を呼び、2回のギャラリートークにも多くのお客さまに参加いただきました。

展示作品点数

25点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
協力：一般社団法人日本クリケット協会
後援：港区教育委員会

企画／デザイン：株式会社ラジアン
プリント制作：写真弘社

併催イベント

・吉岡泰良氏によるギャラリートーク
2024年10月19日(土)・27日(日)
14:00～ ※各回約30分

販売物

写真集「Boundary」(自費出版)

来館者数

合計22,804人(21日間)

来館者の声

雰囲気良く、感動すら覚える写真がたくさんありました。

クリケットの競技シーンだけでなく、周りの情景も合わせて展示しており、大変興味深く拝見しました。

吉岡さんのような作品の展示は、若手の写真家たちが刺激を受けるいい機会だと思います。



出展者の声

初の写真展で右も左も分からない中、テーマ決めからプリントまで、全工程で手厚くサポートいただいて開催までの段階を一つひとつ経験でき、とても勉強になりました。展示が一番苦労したのは、自分の想いを言語化することでした。ギャラリートークも展示への想いを整理する良い機会となりました。この経験が今後の写真家活動の土台になっていくと思います。また、フジフィルム スクエアで写真展を開催させていただいたことは、多くの方々からの信頼につながると感じています。

【写真家たちの新しい物語】

黒岩正和写真展「島魂」—TOUKON—

2025年1月17日(金)～2月6日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3


島人達に
受け継がれる祭り

島魂

黒岩正和 写真展
Masakazu Kuroiwa Photo Exhibition
— TOUKON —

2025年
東京展 1/17(金) ▶ 2/6(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3
10:00～19:00
最終日は16:00まで、入館は終了10分前まで

2025年
大阪展 2/21(金) ▶ 2/27(木)
富士フィルムフォトサロン 大阪 ホワイエ
10:00～19:00
最終日は14:00まで、入館は終了10分前まで

クロストーク
※要予約・予約不要
1/18(土) 2/1(土)
ゲスト：村上仁一氏 (PCT/雑誌『写真』編集長)
ゲスト：園谷真唯氏 (PCT/雑誌『写真』編集部)
※13:00からの40分間

クロストーク
※要予約・予約不要
2/21(金) 2/22(土)
13:00からの40分間 13:00からの30分間
ゲスト：園谷真唯氏 (PCT/雑誌『写真』編集部)
ゲスト：黒岩正和氏 (PCT/雑誌『写真』編集部)
※13:00からの30分間

ギャラリートーク
※要予約・予約不要
2/22(土) 13:00からの30分間
黒岩正和氏 (PCT/雑誌『写真』編集部)
※13:00からの30分間

富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト
【写真家たちの新しい物語】

18歳から野宿で東南アジア各国を放浪したのち、21歳で偶然出会った島の祭りに魅了され、日本の島を撮影し始めた写真家・黒岩正和氏。以来約20年間に日本の有人島(硫黄島を除く)を全て訪れ、400以上の祭りを撮影してきました。本展では島で暮らす人々や風景、独自の文化を反映した活気あふれる祭事を通じて「島の魂」を捉えた作品群から、45点を厳選しました。

構成上の工夫として、日本の祭りは季節に由来するという黒岩氏の考えに基づき、作品を四季に分けて展示しました。もう1つの工夫は、作品にあえて解説文を添えなかったこと。これは、文章を読んで分かってもらうのではなく、純粋に写真を見て、それぞれの方に感じてもらいたいという黒岩氏の挑戦でした。

会期中には、本展のメインビジュアルとした悪石島(鹿児島県)の村長や、祭りに参加した島民の方も来館し、黒岩氏と交流する場面もありました。また、会場に置かれた感想ノートには、日本の島が好きな方や、祭りという伝統文化の大切さを感じた方から熱いメッセージが寄せられるなど、黒岩氏の思いが幅広い方々に届いたことが確かめられました。



展示作品点数

45点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：合同会社PCT
デザイン：株式会社96BOX
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

- ・黒岩正和氏と本展企画者によるクロストーク
2025年1月18日(土) 13:00～ ゲスト：村上仁一氏(PCT/雑誌『写真』編集長)
2月1日(土) 13:00～ ゲスト：園谷真唯氏(PCT/雑誌『写真』編集部)
※各回約40分

販売物

写真集『百島百祭』(光村推古書院)

来館者数

合計20,064人(21日間)

来館者の声

島々の美しい自然と、それぞれの祭りの文化が印象的で、大変素晴らしい写真展でした。

写真として記録に残るのはとても貴重なことです。伝統あるお祭りがこれからも残ってほしいと思いました。

ユニークで面白い展示でした。海外のお祭りのように見えたのですが、日本のお祭りだったなんて。知らないお祭りばかり見られて面白かったです。

出展者の声

私は島の祭りが面白いから撮っているのですが、多くの来館者から「こんな面白いお祭りがあったんだ」と声をかけてもらえて、とても励みになりました。これまで撮りためた写真をアウトプットしていませんでしたが、今回の写真展で自分の立ち位置を再確認できました。私が「祭りの記録を残したい」と思っているのに対し、島の人は「記録」ではなく「祭り」を残したいと言います。日本に多くの魅力ある祭りがあることを広く知ってもらうことで、島の祭りを残すきっかけになればいいと思っています。

【写真家たちの新しい物語】Pedro Gomes写真展 「The Art of Surf Photography」

2025年3月7日(金)～3月20日(木・祝)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース2



日本を拠点にプロのサーフィン写真家として活動するブラジル出身のペドロ・ゴメス氏。高度な撮影技術を駆使した写真が世界的に高く評価されており、国内外の主要なサーフィン誌やウェブサイトにて作品が掲載され、その名は世界のサーフシーンで知られています。

本展では、ゴメス氏がレンズを通し、世界や日本の海における波やサーferたちの色彩と光を鮮やかに表現した、ダイナミックかつ繊細な作品を厳選して展示しました。海が瞬間、瞬間に見せる多様な色を捉えた作品群は、まるで絵画のような美しさ。これらはどの色も、ゴメス氏が見た本物の海の色を大サイズの銀写真プリントで忠実に再現したものです。波の音、風、太陽、そして水の感触まで伝わるような臨場感で見る人を引き込みました。

本展には、サーフィンなどのマリンスポーツ愛好者をはじめ、幅広い年齢層の方々が多数来場されました。ギャラリートークは、時に波と一体になるように海を捉えるゴメス氏の撮影技法、世界各地のビーチの魅力、ゴメス氏が行き届く自然保護活動など、さまざまな話題で盛り上がりしました。

展示作品点数

31点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画／デザイン：株式会社ラジアン
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

・ペドロ・ゴメス氏によるギャラリートーク
2025年3月12日(水)・3月15日(土)
15:00～ ※各回約30分

来館者数

合計12,190人(14日間)



右側がゴメス氏

来館者の声

サーフィンのシーンは迫力があり、とてもきれいでした。

海の色や表情が美しく、かつリアルでした。

写真家の方にサーフィンの撮影についてお話を聞かせてもらえて楽しかったです。

出展者の声

昔から写真が好きでフジフィルム スクエアをたびたび訪れていました。ここで自分の写真展ができたかと憧れており、今回、夢がかなってうれしいです。サーフィンの関係者や写真愛好家などさまざまな方々と交流でき、多くの刺激を受けました。作品について、波の中にサーferがいる様子や、海の色合いの多様さに驚く方が大勢いらっしゃいました。これらは全て実際の海の姿であり、今回、迫力ある大サイズの銀写真プリントで展示でき、私が見た本物の海の美しさや味わいを多くの方々に伝えることができ、本当に楽しかったです。

ポートフォリオレビュー／アワード 2024

2025年3月21日(金)～4月10日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2

開催の経緯

「ポートフォリオレビュー／アワード」は、45歳以下の写真家および写真家を志す方から作品を募集し、プロの写真家による作品講評会（ポートフォリオレビュー、以下レビュー）で作品についてアドバイスを提供するとともに、選考会を経て選出された写真家に個展開催の機会を提供するという企画です。

2024年度のレビュー（講評する講師）を務めたのは、浅田政志氏・公文健太郎氏・小林紀晴氏・野村恵子氏の4名です。

一次選考を通過した48名の中から、2024年8月と9月の計2日間にわたり実施されたレビュー、二次選考で、最終選考会へと進む12名が選出されました。そして、10月の最終選考会でアワード受賞者4名が決まりました。

1. 講評会・選考会

■一次選考会

2024年7月

2024年4～6月に実施した作品募集に対し、全国から定員を大きく上回る応募をいただきました。その中から、レビュー者が参加者48名を選出しました。

■ポートフォリオレビュー 二次選考会

2024年 8月31日／9月7日

レビュー者4名が参加者48名に対し、オンラインでレビューを実施。12名をファイナリストとして選出しました。

■ファイナリストレビュー 最終選考会

2024年10月5日

12名のファイナリストたちが、前回のレビューのアドバイスを生かしてブラッシュアップした作品に対して、レビュー者4名がより深く個別にアドバイスを行いました。参加者とレビュー者との熱い対話が、各人のその後の作品制作のレベルアップにつながる良い機会となりました。

そして10月24日、ファイナリストの中から、レビュー者が1名ずつを推薦し、アワード受賞者4名をWebにて発表しました。

2. 写真展開催までの準備

アワード受賞者4名は、富士フィルムフォトサロンでの個展開催に向けて、それぞれを推薦したレビュー者と企画者から作品や展示に関するアドバイス、富士フィルムから制作に関する各種サポートを受けました。

具体的には、作品のセレクトや構成、編集、銀写真プリントや色校正、告知物・展示物の制作、告知作業、搬入作業などについて、多岐にわたる専門的なアドバイスや支援が行われました。受賞者たちは初体験の連続に試行錯誤しながらも、レビュー者を務めたプロの写真家や多くの関係者とのコミュニケーションを通じて、学びや発見、インスピレーションを得て、自らの創造性を発揮し、個展を実現させました。

受賞者の声（写真展開催までの準備について）

【赤堀あゆみ氏】

印象深かったのは、どの写真をどう並べるかで、全く違う空間になること。浅田さんの助言で導入部分は分かりやすく、中盤は多様な視点の写真を配置するなど、「目からうろこ」の連続でした。写真を通じて「思い」を言語化することも学びました。

【鎌田三四郎氏】

見る人のことを想像して、作品を「見せる」ための流れを作ることを小林さんから教わりました。サイズの変化や余白のある写真で流れや動きを演出するほか、「見せる」ために、時には自分の思いを制御することの必要性も知りました。



【梶瑠美花氏】

今回、女性を被写体に作品を構成しました。多くの女性を撮られてきた野村さんにアドバイスをいただけたことが、本当に心強かったです。写真の選び方から作品のまとめ方、展示の見せ方のテクニックまで、多くの気づきが得られた貴重な経験でした。

【和佐阿佑美氏】

来館者にどんなストーリーや体験を提供するのか。そのためにあるべき作品の色、作るべき空間とは。公文さんからあらゆる視点で教えをいただきました。自分の作品を理解することからはじまり、入念に計画していくことの大切さも痛感しました。

ポートフォリオレビュー／アワード 2024

2025年3月21日(金)～4月10日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1・2



展示概要

本展では、本アワードを受賞した4名の出展者に、彼らを推薦したプロの写真家が写真展開催まで伴走することでブラッシュアップされた作品を、両者のコメントと共に展示しました。笑顔の父親の姿から楽しさと一対の悲しさも表現したポートレート。初対面の被写体との対話で人の内面にある普遍性に迫ったシリーズ作品。風景の中に過去の写真を合わせ、その地に残る人の記憶を表現した記録写真。身近な家族の姿と社会問題という2つの視点をそなえた作品群。独自の表現を追求した作品を通して、来館者に写真の新しい可能性を発見していただける写真展となりました。

～レビュー 野村恵子氏の言葉～

今年の審査会も選考に時間がかかりました。昨年同様に、応募作品のジャンルも多岐にわたり、かつオリジナリティーあふれる作品がひしめき合ったこと、また、応募者の熱意あるプレゼンテーションもそれぞれ説得力があり、私たちレビューは、「何を基準に最終的に4名の受賞者を選べばいいか?」ということについて協議、考慮しました。そして、悩んだ末に最終的に4名に絞られた方々の決め手は、やはり“未知数の伸びしろ”にあった気がします。

このアワードの特徴の一つに、受賞者として選ばれるだけでなく、初回からレビューの真摯なポートフォリオレビューを受けられることがあります。もう一つの特徴は、受賞者を各レビューと企画者が展示開催まで、それぞれの制作プロセスで伴走しながら創り上げていくということだと思います。

そのため、応募作品だけではなく、写真作家としての潜在的な力と、その後の展示作品を練り上げる中で成長していく姿までを、できる限り見据えようとしていました。完成した写真展と併せて、そうした今回のプロセスが映された動画もぜひご覧いただけたらと思います。

そして、ぜひ次回は皆さまも応募いただき、熱のあるポートフォリオレビューにご参加いただけたらと思います。

出展写真家および展示作品点数

Vol.1 赤堀あゆみ 55点 Vol.2 梶瑠美花 33点
Vol.3 鎌田三四郎 18点 Vol.4 和佐阿佑美 23点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画／運営協力：株式会社コンタクト、デジタルカメラマガジン編集部
デザイン：長尾敦子
プリント制作：プロラボ クリエイト

併催イベント

- ・浅田政志&公文健太郎&小林紀晴&野村恵子によるトークショー
2025年3月22日(土) 13:30～15:00
- ・梶瑠美花×野村恵子・赤堀あゆみ×浅田政志によるギャラリートーク
2025年3月29日(土) 13:30～14:30
- ・和佐阿佑美×公文健太郎・鎌田三四郎×小林紀晴によるギャラリートーク
2025年4月26日(土) 13:30～14:30

販売物

- ・梶瑠美花 [MY HALF OTHER] [SUGAR FOR THE PILL]
- ・和佐阿佑美 [みどりのみち]

来館者数

合計19,309人(21日間)

受賞者発表動画



実施レポート

若手写真家がプロの写真家との熱い対話を経て視点を広げることで、改めて自らの思いに向き合って写真表現を突き詰め、独創的な作品へと昇華させるまでを支援する本展の試みに、今回も多くの方々から称賛の声をいただきました。受賞者の方々は、会期中にもギャラリートークへの出演や来館者の方々との対話という、新たな経験を次々と重ね、新たな創造のヒントや今後への意欲を得ていました。

Vol.1 赤堀あゆみ(写真:左)「ちちよせあつめ」(レビュー:浅田政志)



赤堀氏は、父親の遺暦を機に、記念写真や父親の普段の姿、視覚的に面白いと感じた写真を作品にし、一緒に過ごしてきた時間の強さや楽しさを表現。父親との関係性や、笑いの中に将来へのもの悲しさも伝わる作品の力が評価されました。国内外からの来館者が、元気が出た、父が恋しくなったなどと声を掛け、見る人の強い思いを呼び起こしていることがうかがえました。**【赤堀氏のコメント】**…自分の写真とじっくり向き合った上で、今回、作品をランダムに並べつつ、大きさに変化を付けて流れを作る展示を目指しました。ポップで明るい写真でも人により受け取り方が異なっていて、さまざまな思いを呼び起こす写真の力ってすごいなと思いました。



Vol.3 鎌田三四郎(写真:右)「影を遺す」(レビュー:小林紀晴)



鎌田氏は、「記憶と場所を結びつける行為」を視覚化する試みに挑戦。祖母の古民家を撮影する際に古い家族写真を合わせることで、自分のルーツを明らかにし、自身の身体や記憶、そして祖先の魂がその土地や場所に存在していることを証明しようと試みました。過去の写真と現在の風景を組み合わせた作品群は、新しい写真表現の可能性を広げるものとなりました。**【鎌田氏のコメント】**…当初は作品に複数の要素を込めていました。小林さんと相談し、コロナ禍で簡素化された葬式を昇華する思いでコンセプトを「儀式」に統一しました。このコンセプトの下で追加の撮影も行っており、お客さまにもよく伝わり、手ごたえを感じました。



来館者の声 (Vol.1～Vol.4)

トークショーで若手写真家たちの熱い思い、プロの写真家からは若手への励ましや聞き、写真表現についてさまざまな視点で述べられていて学びになりました。時間を忘れてしまうほど楽しかったです。

Vol.2 梶瑠美花(写真:左)「わたしのなかの彼女」(レビュー:野村恵子)



新型コロナウイルス感染症が社会を脅かした時期に医療従事者として働き、自分を見失いかけたという梶氏は、SNSでつながった見知らぬ女性たちに会い、その世界に入り込んで写真を撮影。誰もが抱える心の闇と輝きを表現したモノクロ作品の面白さが注目されました。女性たちが抑圧された世界から解放される様子も捉えたその作品には、女性はもちろん、男性や幅広い年代・国籍の方から共感の声寄せられました。**【梶氏のコメント】**…さまざまな分野のプロの皆さんが一丸となって写真展を作っていることに驚くと同時に、その方々から支援いただけることがありがたかったです。想像以上に多くの方に見てもらえて、私の思いを受け取っていただき感激でした。



Vol.4 和佐阿佑美(写真:右)「みどりのみち」(レビュー:公文健太郎)



50余年前に開発された大阪・泉北ニュータウンで暮らす和佐氏は、自身の子どもや家族の姿を捉えた作品を展示。家族との見えないつながりを表現するというテーマに加え、自らを取り巻く環境も写すことで、ニュータウン政策の光と影という社会的テーマにまで切り込もうとした着眼点、写真一点一点の質の高さが評価されました。**【和佐氏のコメント】**…2つのテーマを感じ取ってもらえるよう展示を工夫したところ、来館者とお話しする中でそのことが伝わっていたと分かってうれしかったです。いただいた感想や他の出展者の作品を拝見し、自分の固定観念を壊すような作品制作に挑戦したい、と気持ちを新たにしています。



作品を見ていたら、写真家のご本人が声を掛けてくれて、おしゃべりしました。こういう出会いがあると、より楽しく見られますね。

一瞬を捉える感性が素晴らしい。多様な表現を知るよい機会でした。

GFX Challenge Grant Program 2023 ～Make Your Next Great Image～

2024年11月8日(金)～11月28日(木)
富士フイルムフォトサロン 東京 スペース1・2・3・ミニギャラリー



展示概要

世界各国・地域で活躍するクリエイターを支援する富士フイルム主催の助成金プログラム[GFX Challenge Grant Program]も3回目となりました。2023年8～10月、全世界を3つに分けた各地域から、クリエイティブなアイデアと制作テーマをまとめた撮影企画書を募集。地域別での一次・二次選考、外部審査員を招きグローバルで実施した最終選考まで3カ月をかけ、2024年1月に受賞15テーマが決定しました。その後、制作活動のサポートとして「Global Grant Award(大賞)」受賞者5名には10,000ドル相当、「Regional Grant Award(優秀賞)」受賞者10名には5,000ドル相当の助成金を提供するとともに、制作用機材として超高画質撮影が可能な「富士フイルム ラージフォーマット デジタルカメラシステム GFX」を無償貸与しました。

本展では、約6カ月の制作期間を経て完成した15名のクリエイターによる15作品を一堂に展示。社会・文化・人間などさまざまなテーマを掘り下げたオリジナリティーあふれる作品を富士フイルムの銀写真プリントで展示したほか、動画作品はモニターで上映しました。

さらに今回は初の試みとして、オープニングに合わせて来日した受賞者11名の作品に対し、審査員を務めたキュレーター2名によるポートフォリオレビューを実施(非公開)。より踏み込んだ支援を行ったことで、クリエイターの方々から好評をいただきました。

出展クリエイター

- ・ Global Grant Award 受賞者
ジョディ・ウィンドヴォーゲル(Jodi Windvogel)／南アフリカ、ファン・カルロス・レイエス(Juan Carlos Reyes)／メキシコ、マーカス・ナールティヤルヴィ(Markus Naarttijärvi)／スウェーデン、彭澤萱(Shina Peng)／台湾、ヴァネッサ・ヴェットレロ(Vanessa Vettorello)／イタリア
- ・ Regional Grant Award 受賞者
アレックス・ベラスコ(Alex Velasco)／米国、ディク・スー(Dike Su)／中国、ジャテニパット・ケットプラディット(Jatenipat Ketpradit)／タイ、ジェリック・“アンヨ”・コラントス(Jerick “Anyo” Collantes)／カナダ、オ・ジョンフン(Junghoon O)／韓国、ケイラ・サンボ(Kaylah Sambo)／米国、ラルグ・ジャンゴ(Large Django)／フランス、ミ斯拉フ・メセック(Mislav Mesek)／クロアチア、サンティアゴ・ハビエル・バサン(Santiago Javier Bazan)／アルゼンチン、ユン・ソクジュン(Seokjun Yun)／韓国

展示作品点数
133点+動画5点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社 デザイン：長尾敦子
企画：株式会社コンタクト プリント制作：プロラボ クリエイト

Web公開動画

15作品の写真家によるメイキング映像



来館者数

合計20,201人(21日間)



受賞者11名がオープニングに合わせて来日。審査員によるポートフォリオレビューも初実施

さまざまな国・地域のクリエイターによる多様な世界観の作品を一挙に展示

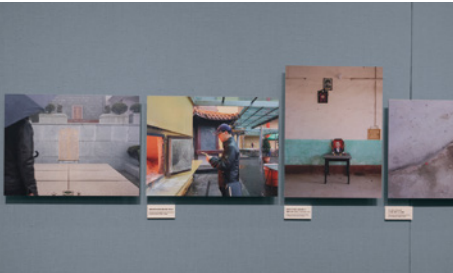
今回受賞したのは、南アフリカ・メキシコ・スウェーデン・台湾・イタリア・米国・中国・タイ・カナダ・韓国・フランス・クロアチア・アルゼンチンのクリエイター15名。写真家だけでなくビデオグラファーや映画監督など、得意分野もドキュメンタリー・風景・ポートレートなどさまざまです。

ジェンダーや気候変動といった大きな社会問題について問いかける作品、クリエイター自身のルーツをたどる作品、舞踊やスポーツにおける身体を捉えた作品——コンセプトも被写体も多種多様であるだけに、それぞれをどのように構成するかが重要なポイントでした。そこで、事前に各クリエイターと入念に打ち合わせて意向を聞き、それを最大限に反映した展示としました。その表現意図は鑑賞する方々にも確実に伝わり、多くの来館者は作品の世界観やメッセージに強い印象を受けていました。

また、今回は大賞受賞者5名を含む11名が来日。銀写真プリントの繊細な色表現と、構成上の工夫が凝らされた展示に対し、喜びと感謝の言葉をいただきました。富士フイルムは今後も本プログラムを継続し、世界のクリエイターによる写真・映像作品の創造と発表の場づくりに貢献していきます。



【大賞】ヴァネッサ・ヴェットレロ Vanessa Vettorello (イタリア)
「Wandering Star(遊星)」
クリエイター自身も幼少時代に大きな影響を受けた「斜視」が、人々のアイデンティティや自己認識にどのような影響を与えるかを探究した作品。各写真の人物の背景などを解説した紙資料を配布し、鑑賞の手引きとした



【大賞】彭澤萱 Shina Peng (台湾)
「Furusato(郷)」
クリエイターが父親とともに祖父の故郷の都市を巡り、自身のルーツ、家族の愛や絆を探ったドキュメンタリープロジェクト。作品の雰囲気に合わせてマット紙でプリントした写真を、物語をたどるように横一列に配置した



【大賞】マーカス・ナールティヤルヴィ Markus Naarttijärvi (スウェーデン)
「Hinterland(ヒンターランド)」
スウェーデン北部でグリーン産業に関わる工場を中心に据え、文化的・自然的景観を捉えた作品。クリエイターの意向で3つの場所を取り上げて作品をグルーピング。内容に応じてマットやグロッシーなどプリント方法も変えた



【大賞】ジョディ・ウィンドヴォーゲル Jodi Windvogel (南アフリカ)
「The Body at Risk(危険にさらされる身体)」
南アフリカの女性たちが置かれた社会状況を背景として形作られた風景を掘り下げ、そこに隠された物語に焦点を当てた作品。個々の写真にキャプションを添えることで、よりの確にメッセージが伝わるようにした



【大賞】ファン・カルロス・レイエス Juan Carlos Reyes (メキシコ)
「Guardians of Mother Language(母なる言葉の守護者たち)」
消滅の危機にある言語を話す先住民たちの姿をポートレートと映像で記録したプロジェクト。人々の表情を捉えたモノクロ写真と、その言語で歌う人物の動画を組み合わせることで、シンプルかつ力強い表現になっている

《来館者の声》

新たなクリエイティビティに出会える貴重な場になっていると感じます。すごみを感じる「GFX」の高画質がますます生かされた作品ばかりでした。

素晴らしい作品ばかりで、この助成金プログラムの有効性を感じました。世界各地の優れた才能を埋もれさせないためにも、今後もこうした企画で支援を続けてほしいです。

一枚の写真に対する各クリエイターの思い入れを感じました。コンセプト動画も非常に興味深かったです。

グローバルな環境問題への取り組みなど、クリエイターによる価値あるプロジェクトが写真を通して発信されており、素敵でした。

受賞したクリエイターの方々による展示作品やメイキング動画を拝見し、写真を撮るモチベーションとインスピレーションをもらいました。

19 富士フィルム・グリーンファンド 40周年企画 第2弾「公益信託を通じた富士フィルムの自然環境保護・保全活動」

2024年5月3日(金・祝)ー5月16日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



1983年に富士フィルムが設立した「富士フィルム・グリーンファンド」は、民間企業による自然環境保全をテーマとした日本初の公益信託。本展では、同ファンドが助成してきた全国各地の団体や研究者による自然環境の保全・保護活動を紹介しました。身近な自然や、生き物のつながり、人とのかかわりなどを考えるきっかけとしていただくとともに、近年関心の高まっているSDGsやネイチャーポジティブ(自然を守って回復させる)について知っていただく写真展としました。

展示作品点数

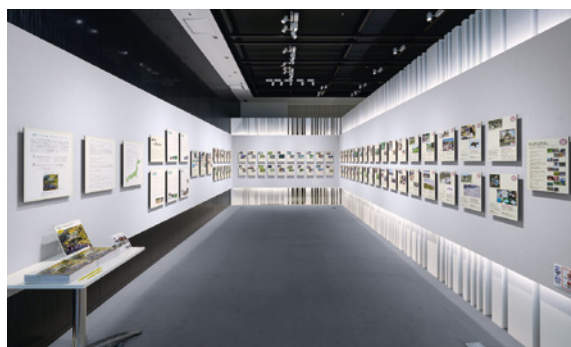
80点

クレジット

主催:富士フィルム株式会社
後援:公益信託 富士フィルム・グリーンファンド
企画協力:一般財団法人 自然環境研究センター
プリント制作:プロラボ クリエイト

来館者数

合計17,050人(14日間)



当社協力写真展

20 日蘭協会70周年記念写真展 ～会員たちが見た日蘭の物語～

2024年12月13日(金)ー12月26日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



日本とオランダの相互理解促進と両国民の友好親善関係の増進を目的に、1912(大正元)年に発足し、第2次世界大戦による活動中止の後、1954(昭和29)年に再発足した日蘭協会の70周年を記念した写真展です。会員から応募いただいた両国の風景・文化や友好関係をテーマにした作品など158点を展示。日本とオランダのさらなる友好親善関係強化の契機になることを願い、写真を通して両国の文化交流の歴史とその素晴らしさを伝えました。

展示作品点数

158点

クレジット

主催:日蘭協会
共催:富士フィルム株式会社
企画/デザイン:株式会社ラジアン
プリント制作:プロラボ クリエイト

販売物

・『わたしと日本の70年』(西田書店)
・『The Call of Japan』
(Renaissance Books Ltd)

来館者数

合計24,659人(14日間)



21 写真家Ivan Joshua Loh主催 「世界中のXシリーズ愛好家による写真展」

2024年4月19日(金)～5月2日(木)
富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3



2011年の「FUJIFILM X100」発売以来、世界中に愛好家の輪を広げてきた富士フィルムのミラーレスデジタルカメラ「Xシリーズ」。本展では、同シリーズを愛用するシンガポール在住の写真家Ivan Joshua Loh氏が運営するユーザーコミュニティ「FujiFanBoys」上で公募された、広告・建築・ファインアート・ネイチャー・ポートレート・スポーツ・ストリートの7ジャンル、12,000件超の応募作品から選ばれた35枚を展示しました。

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：プロラボ クリエイト

展示作品点数

35点

来館者数

合計13,999人(14日間)

22 2024年11月29日(金)～12月12日(木) 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース3

VR PHOTO EXHIBITION Vol.3



メタバースなどのVR(仮想現実)空間内で、3Dアバターやバーチャルの風景などを被写体として撮影活動をしているVR Photographerによる公募展です。VR PHOTOを高画質プリントにより実体を持ったアート作品として展示することで、その魅力をより多くの人に知っていただきました。

招待作家(一部)

えこちゃん、BIS

展示作品点数

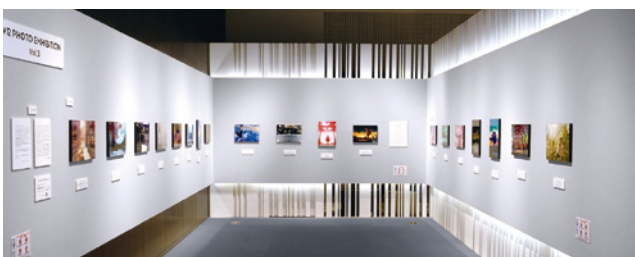
19点

来館者数

合計31,276人(14日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
企画：一般社団法人メイクスマイルプロジェクト
デザイン：株式会社サンクスギビング
プリント制作：プロラボ クリエイト



23 2025年1月24日(金)～2月6日(木) 富士フィルムフォトサロン 東京 スペース1

KG+ Discovery Award 2024 受賞作品

青木 弘 写真展「JUHEISEN 樹平線」～中央アフリカ共和国より愛を込めて～



「KG+ Discovery Award」は「KYOTOGRAPHIE京都国際写真展」のサテライト展である「KG+」に出展する全ての展覧会*を対象に、富士フィルムが優れた作品を選出する賞で、2024年よりスタート。その第1回に選出されたのが、内戦や貧困、人間の尊厳をテーマに10年以上アフリカを撮影し続けてきた写真家・青木弘氏の作品です。本展では、中央アフリカ共和国で生活する人々の日常を取材、撮影した貴重なドキュメンタリー作品を展示しました。 *「KG+SELECT」を除く。

展示作品点数

62点

来館者数

合計13,232人(14日間)

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
プリント制作：Kuanyin Arts Co.、プロラボ クリエイト

併催イベント

・青木弘氏によるギャラリートーク
2025年1月25日(土)・26日(日)・
2月1日(土)・2日(日) 16:00～
※各回約30分

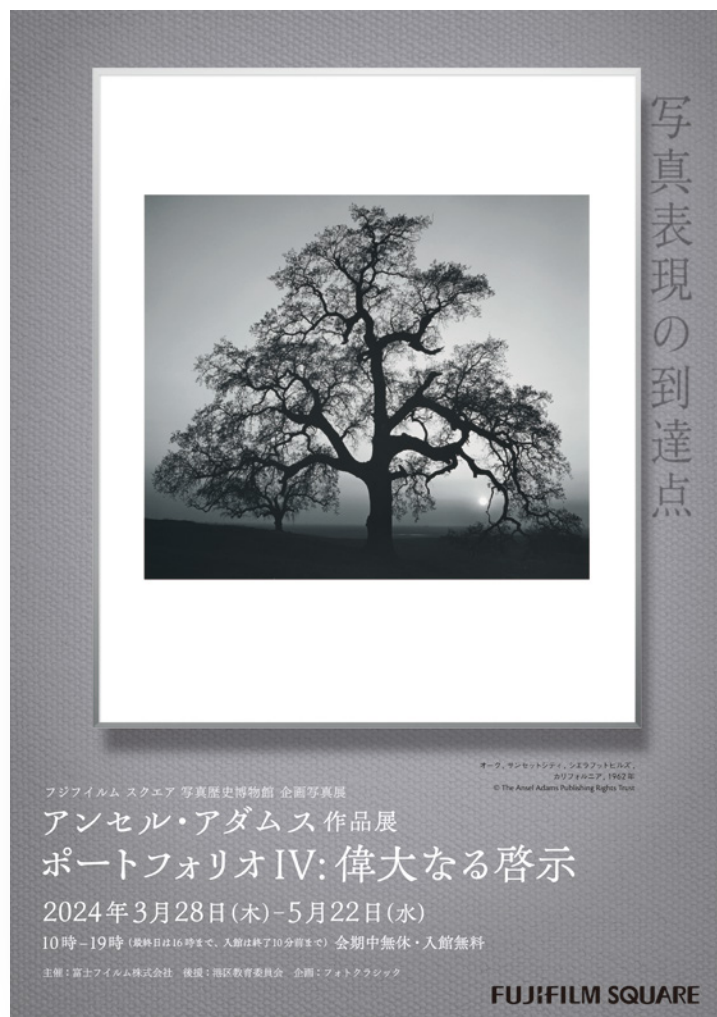
販売物

・写真集「樹平線」(モーターマガジン社)
・写真集「HEAL AFRICA」(冬青社)
・Tシャツ、トートバッグ、キャップ、
ひよこジュエリー、泥まみれのプリント



アンセル・アダムス作品展 「ポートフォリオIV:偉大なる啓示」

2024年3月28日(木)–5月22日(水)
写真歴史博物館



写真表現の到達点

銀塩写真による写真表現を追求し、その頂点を極めた20世紀写真の巨匠、アンセル・アダムス(1902–1984)。本展では、彼の最高傑作の一つともいわれる作品集「Portfolio IV: What Majestic Word (ポートフォリオIV:偉大なる啓示)」の全15点を公開。アダムス自身が制作したゼラチン・シルバー・プリントによる貴重なオリジナルプリントを展示しました。

アダムスは、理論と技術に裏打ちされた究極的に美しい銀塩写真作品を生涯にわたって多数制作。それらの作品は、写真の美術的価値を高め、社会的な認識を変えるきっかけとなりました。その一方でアダムスは、米国に本部を置く自然保護団体「シエラ・クラブ」の理事を長年務め、自然環境の保護にも積極的に取り組みました。

本展の作品集「ポートフォリオIV」は、アダムスと同じくシエラ・クラブの一員で、真空管「クライストロン・チューブ」の開発者としても知られるラッセル・バリアンを追悼して1963年に制作されたものです。バリアンが愛した米国の自然風景を捉えた写真作品15点をアダムス自身が選定し、バリアン・ファウンデーションの支援のもと、シエラ・クラブから260部限定で出版されました。

本展で展示したのは260部のうちの「No.101」で、富士フイルム株式会社が所蔵する写真コレクションの一つです。2010年にフジフイルム スクエア 写真歴史博物館がリニューアルオープンした際に第1弾企画展として初公開され、反響を呼びました。そして今回、富士フイルムグループ創立90周年に当たる2024年に、再び本作を展示しました。

希少価値の極めて高い作品を見られるということで本展を目的に来館した方が多く、オリジナルプリントの圧倒的な表現の豊かさに対する感動や、荘厳なまでに美しい自然の描写に称賛の声が上がるなど、傑作を通じて写真の本質を感じていただく機会にもなりました。



展示作品点数

15点

クレジット

主催：富士フイルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：株式会社フォトクラシック
デザイン：脇野直人

主要メディア掲載

新聞：東奥日報(3月28日)／写真・カメラ紙(誌)：CAPA(3月19日)、デジタルカメラマガジン(3月19日)、フォトコン(3月19日)、隔月刊風景写真(4月19日)／その他雑誌：月刊ギャラリー(4月1日、5月1日)／Web：TOKYO ART BEAT、アートアジェンダ

来館者数

合計58,518人(56日間)

来館者の声

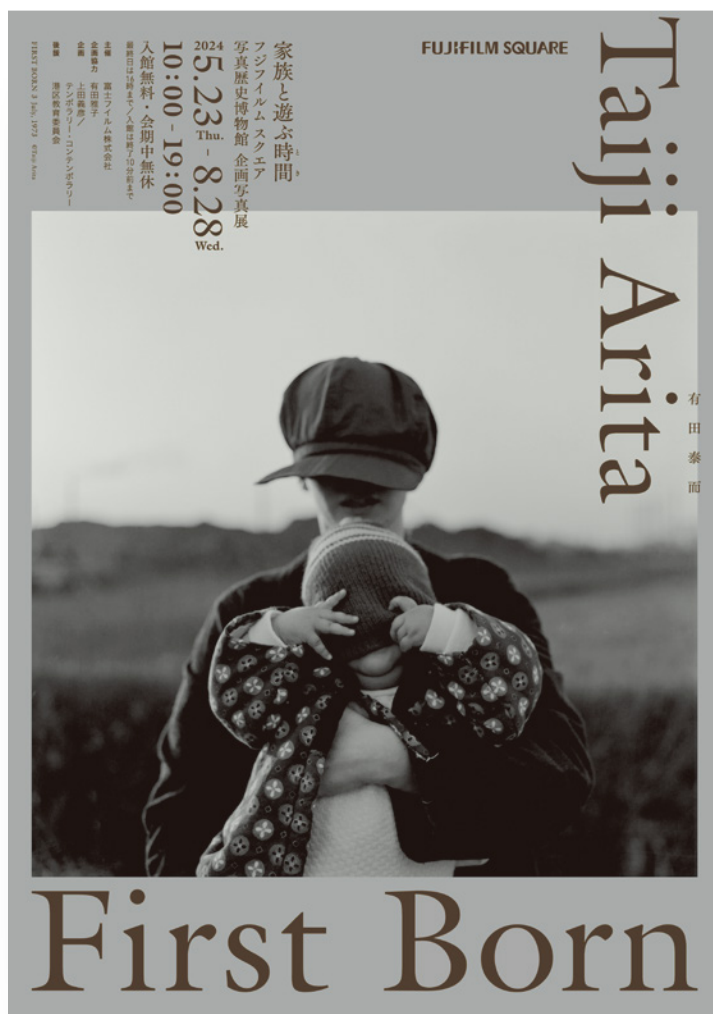
アンセル・アダムスの美しいオリジナルプリントを見ることができて感動しました。

雄大な作品が素晴らしいかったです。

写真家の自然に対する謙虚な姿勢が作品から感じられ、感銘を受けました。

ありた たいじ
有田泰而

「First Born」 — 家族と遊ぶ時間 —

2024年5月23日(木)–8月28日(水)
写真歴史博物館

展示作品点数

20点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
 後援：港区教育委員会
 企画協力：有田雅子
 企画：上田義彦、
 テンポラリー・コンテンポラリー
 デザイン：横山曜(ナウプリンティング)
 プリント制作：写真弘社

併催イベント

- ・上田義彦氏によるギャラリートーク
2024年5月25日(土) 15:00～15:30
- ・テンポラリー・コンテンポラリー
木本禎一氏によるギャラリートーク
2024年6月22日(土) 15:00～15:30

販売物

- ・『フジフィルム・フォトコレクション』図録
- ・『フジフィルム・フォトコレクション』図録(コンパクト版)

主要メディア掲載

写真・カメラ紙(誌)：CAPA(6月20日)／Web：朝日新聞デジタルマガジン&[and]、
 @DIME、CREA WEB、産経ニュース、JBpress、東洋経済オンライン、PRESIDENT
 Online、毎日新聞デジタル、読売新聞オンライン

来館者数

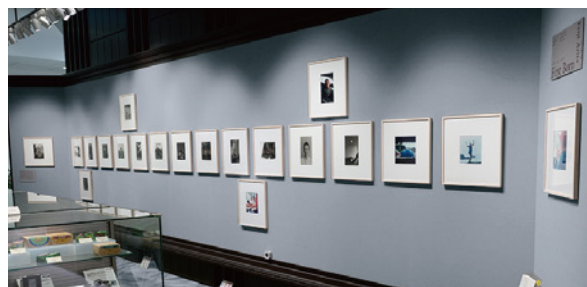
合計97,554人(98日間)

写真家・有田泰而(1941–2011)は、広告写真を多数手がけた一方で、自らの美意識に忠実な創作写真にも取り組み、さらに油彩画家としても活躍しました。その代表作である「First Born」シリーズを中心とする稀代の家族写真に焦点を当てたのが本展です。

1960年代後半から70年代半ばに、有田が当時の妻と第一子を撮影した、撮る側と撮られる側の無邪気な遊び心に満ちあふれた作品群は、1973年から1974年に『カメラ毎日』誌上に「First Born」シリーズとして掲載されました。それらが再び目の目を見たのは、有田が亡くなった翌年の2012年。若き日に「First Born」シリーズに憧れて有田に師事した写真家・上田義彦氏が、有田の生前の構想ノートをもとに、2カ月近くをかけて印画紙に焼き付け、写真集『First Born』および同名の展覧会として発表しました。

本展では、写真集『First Born』制作時に入稿されたオリジナルプリントから20点を厳選。また、上田氏が写真集制作の参考にした有田の貴重な構想ノートも展示しました。

会期中には上田氏によるギャラリートークも開催。50人近い参加者を前に、有田や「First Born」シリーズとの出会い、写真集『First Born』制作の経緯、今回の写真展への思いなど、当事者の視点からの貴重なお話を語っていただきました。また、このギャラリートークの内容は、後日フジフィルム スクエアの公式サイト上に文章で公開、生前の文献があまり残されていない有田の制作活動の様子を伝える、写真史的にも価値ある資料となりました。



左が上田氏、右が木本氏

来館者の声

コンシェルジュの方に有田先生の略歴から弟子の上田先生とのご関係、作品背景までを説明いただきました。上田先生の後書きに感動し、涙がこぼれそうになりました。

写真に興味があり、立ち寄りしましたが、ここまで感動をもらえると思っていませんでした。ありがとうございました。

有田さんについてのお話がとても分かりやすく、素敵な時間になりました。

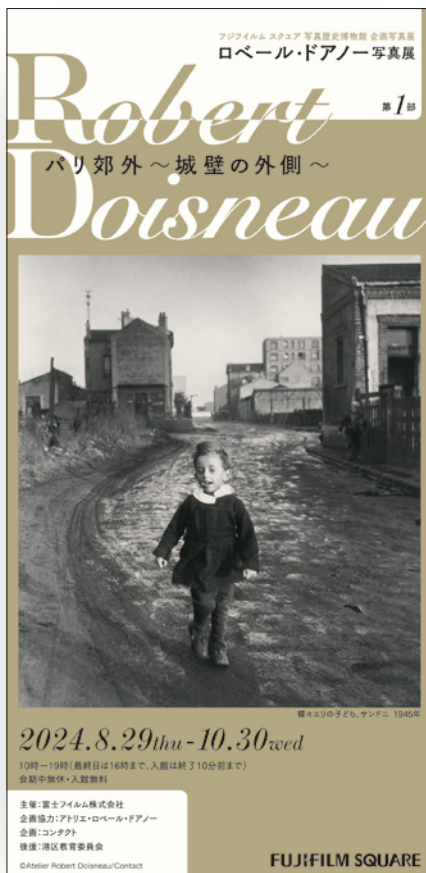
ロベール・ドアノー写真展

第一部「パリ郊外 ～城壁の外側～」／第二部「“永遠の3秒”の原点」

〈第一部〉2024年8月29日(木)～10月30日(水)

〈第二部〉2024年10月31日(木)～12月26日(木)

写真歴史博物館



“イメージの釣り人”とも評される類いまれな洞察力と遊び心に満ちた感覚で、日常に潜むドラマを捉えた独自の世界を築き上げ、フランスの国民的写真家とも称されるロベール・ドアノー(1912～1994)。2024年に没後30年を迎えた彼の写真展を、第一部・第二部の2期にわたって開催しました。

かつては城壁でパリ市街と隔てられていた郊外、貧困層や移民が多く暮らすエリアに生まれ10代から働いていたドアノーにとって、「写真を撮ること」は「生活の糧を得ること」であり、彼は生涯「職人」を貫きました。19歳で写真家の助手となったのち、決して恵まれているとはいえない人々の生活とその背景をなす風景を撮りためた作品群は、1949年、初の写真集『パリ郊外』として出版されます。本展第一部では、パリ郊外を捉えた比較的初期の作品を取り上げ、ドアノーの原点に迫りました。

一方、本展第二部では“職業写真家としてのロベール・ドアノー”に焦点を当てました。生涯を通じて撮影した約45万点の写真の大半が、依頼された仕事のために撮影されたものといわれるドアノー。そこで今回は、産業カメラマンとして勤めたルノー社での仕事や、1950年に米国のグラフ雑誌『LIFE』に掲載されたドアノーの代表作「パリ市庁舎前のキス」をはじめ、フランスの『ポワン・ド・ヴュ(Point de Vue)』『ル・ポワン(Le Point)』といった雑誌に掲載された作品、さらには広告のために撮影された作品など、38点を厳選して展示しました。

会場は連日、外国人を含む多数の方が訪れ、ドアノーの国際的な人気がうかがえました。ドアノーのドキュメンタリー映画上映と併せて、彼の写真に感銘を受けてきたという写真家・平間至氏をゲストに迎えて開催されたトークイベントも、定員を大幅に超える方々が参加するなど、大盛況でした。



左から、佐藤氏、平間氏

展示作品点数	クレジット	来館者数
第一部 36点 第二部 38点	主催：富士フイルム株式会社 後援：港区教育委員会 企画協力：アトリエ・ロベール・ドアノー 企画：株式会社コンタクト デザイン：ナノナグラフィックス	第一部 合計66,767人(63日間) 第二部 合計84,519人(57日間)

併催イベント(第一部)	併催イベント(第二部)
・「パリ郊外 ～城壁の外側～」ギャラリートーク (ゲスト：堀内花子氏<フランス語通訳・翻訳>、聞き手：佐藤正子氏<本展企画、コンタクト>) 2024年10月19日(土) 15:00～15:40	・写真展開催記念 映画上映&トークイベント (ゲスト：平間至氏、聞き手：コンタクト 佐藤正子氏) 2024年11月4日(月・振休) 16:00～18:30 ※トークイベントは映画上映前の16:00～17:00に開催

主要メディア掲載(第一部)	主要メディア掲載(第二部)
新聞：朝日新聞夕刊(東京、8月27日)、日本経済新聞(東京、10月6日／大阪、10月6日)／Web：@DIME、iza、CREA WEB、産経ニュース、JBpress、東洋経済オンライン、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、MdN	Web：朝日新聞デジタルマガジン&[and]、CREA WEB、産経ニュース、JBpress、東洋経済オンライン、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、@DIME、livedoor ニュース

来館者の声

当時のパリの風景や人々の生活感が鮮やかに切り取られていて、現在の華やかな様子とは異なるほのぼのした温かみを感じ、とても優しい気持ちになりました。

現代のスナップ写真感覚で人々の素の表情、風景などの空気感まで写真に残すことのできるこんな写真家がいいたというのは、とても素敵なことですね。

よく見るピカソの写真がドアノーの作品であることにびっくりしました。特に初期の作品はすごく情緒にあふれていて素敵でした。

立木義浩写真展

「舌出し天使 CONTACT SHEETS – 眼差しの軌跡 –」

2025年1月6日(月)–3月26日(水)
写真歴史博物館

展示作品点数

25点+コンタクトシート24点

クレジット

主催：富士フィルム株式会社
後援：港区教育委員会
企画：テンポラリー・コンテンポラリー
デザイン：横山曜（ナウプリントング）
プリント制作：写真弘社

併催イベント

・立木義浩氏によるギャラリートーク
（聞き手：テンポラリー・コンテンポラリー
木本禎一氏）
2025年1月12日(日)・2月16日(日)・
3月15日(土) 13:00~13:30

販売物

- ・『フジフィルム・フォトコレクション』図録
- ・『フジフィルム・フォトコレクション』図録（コンパクト版）
- ・『舌出し天使 CONTACT SHEETS 眼差しの軌跡』（テンポラリー・コンテンポラリー）
- ・『舌出し天使』（リブリアルメディアパル）

主要メディア掲載

新聞：朝日新聞（東京、1月13日）、読売新聞（東京、2月12日）、日刊ゲンダイ（東京、2月18日）、徳島新聞（3月5日）／写真・カメラ紙（誌）：フォトコン（2月19日）／Web：antenna、東洋経済オンライン、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、Yahoo! ニュース、朝日新聞デジタル

来館者数

合計81,438人（80日間）

87歳の今も精力的に活躍する立木義浩氏が27歳で発表した傑作「舌出し天使」の発表60年を記念した写真展です。

高度経済成長期の1964年、広告制作会社の社員フォトグラファーとしてアパレル広告や『週刊平凡』『平凡パンチ』など新進雑誌を舞台に活躍していた立木氏に目をつけたのが、『カメラ毎日』誌の編集者・山岸章二でした。山岸から「ノーギャラだが何をやっても自由」という条件を提示された立木氏は、17歳のモデルの少女を被写体に東京のさまざまな場所へと赴き、街に放たれて動き回る少女と自由闊達なセッションのように撮影を実施。その成果は『カメラ毎日』1965年4月号に異例の56ページにわたって掲載され、日本写真史に残るセッションを巻き起こしました。

そんな「舌出し天使」をフィーチャーした本展の大きな特徴は、立木氏自身が新たにセレクトしたゼラチン・シルバー・プリント25点を展示したことに加え、同作のコンタクトシート24点を初公開したことです。コンタクトシートとは、フィルム1本分の画像を1枚の印画紙上に並べて等倍でプリントしたものの。いわゆる「OKカット」を選ぶ際に用いられ、通常それ自体が公開されることはありません。今回それをあえて公開することで、若き日の立木氏が被写体と創り上げた時間、みずみずしい眼差しを来館者に感じていただきました。

期間中に3回開催したスペシャルギャラリートークでは、立木氏自身が語る「舌出し天使」撮影当時のエピソードに多くの来館者が耳を傾けました。また、新聞・雑誌・Webメディアで本展が取り上げられるなど、高い注目を集めました。



来館者の声

60年前のコンタクトシートを当時のまま展示するという、普通ではない面白い展示だと感じました。コンタクトシートに書き込まれた筆跡から、当時の立木先生の気持ちが少し分かる気になりました。

立木さんに関する解説をスタッフの方からお話しいただき、展示内容がより印象的になりました。

コンタクトシートとのセットでの展示ということで、最終的にセレクトした作品とその前後の作品を見比べたり、思考の過程を追いかけてたりと、興味深く拝見しました。

写真展開催リスト

■富士フィルムフォトサロン 東京・ミニギャラリー／開催写真展 計80本(当社が主催・協力する企画展38本、公募展42本)	
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 丸井みのる写真展「Sense」 ― 心に重なる感覚～熊野にて ―	2024年3月29日(金)～4月18日(木)
第21回 港区観光フォトコンテスト	2024年3月29日(金)～4月24日(水)
「第62回 富士フィルムフォトコンテスト」入賞作品発表展	2024年4月12日(金)～4月24日(水)
富士フィルム 企画写真展 写真家Ivan Joshua Loh主催「世界中のXシリーズ愛好家による写真展」	2024年4月19日(金)～5月2日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 富士フィルムグループ 創立90周年記念コレクション展 「フジフィルム・フォトコレクションⅡ」世界の20世紀写真「人を撮る」	2024年4月26日(金)～5月16日(木)
富士フィルムグループ 創立90周年記念 富士フィルムの歴史を築いたフィルム&カメラ	2024年4月26日(金)～5月16日(木)
富士フィルム 企画写真展 富士フィルム・グリーンファンド 40周年企画 第2弾「公益信託を通じた富士フィルムの自然環境保護・保全活動」	2024年5月3日(金・祝)～5月16日(木)
橋本義光写真展「鰯街道 …若狭から京へ…」	2024年5月17日(金)～5月23日(木)
むらいさち写真展「FantaSea ～ゆるふわなうみのせかいへ～」	2024年5月17日(金)～5月23日(木)
第16回 六本木フォトコンテスト写真展	2024年5月17日(金)～6月13日(木)
ロイヤルリゾート「四季的那須フォトコンテスト」写真展	2024年5月17日(金)～6月13日(木)
一般社団法人 日本自然科学写真協会 第45回 SSP展「自然を楽しむ科学の眼2024-2025」	2024年5月24日(金)～5月30日(木)
東京写真月間2024 日本写真協会賞受賞作品展	2024年5月31日(金)～6月6日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 竹見脩吾 トライアスロン報道写真展「Triathlete(トライアスリート) ―限界のその先へ―	2024年5月31日(金)～6月13日(木)
斎藤裕史写真展「HaNa Landscape 花からいただくリフレッシュ」	2024年6月7日(金)～6月13日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 中村征夫写真展「海中顔面大博覧会」	2024年6月14日(金)～7月4日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 廣田比呂子写真展「ハロー!ナマステ!こんにちは!」 ― 最高に幸せになれるインド ―	2024年6月14日(金)～7月4日(木)
築地クラブ写真展「エモーション」	2024年7月5日(金)～7月11日(木)
長嶋厚樹写真展「星のある風景Ⅱ」(一枚撮りの星景色)	2024年7月5日(金)～7月11日(木)
富士フィルムグループスポーツ企画展 富士フィルムホールディングス株式会社 企画写真展 富士フィルム・スタジオアリス女子オープン写真展 ～ワクワク、感動、みんなの笑顔。～	2024年7月5日(金)～7月25日(木)
第17回 山中湖フォトグランプリ写真展	2024年7月5日(金)～7月25日(木)
DANNP30年記念写真展 2024「北の貌(かたち)」	2024年7月12日(金)～7月18日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 茂野優太写真展「THE SOUTHERN LIMIT of DRIFT ICE」流氷がやってくる最南端の海	2024年7月12日(金)～7月25日(木)
広映会写真展「季のハーモニー」	2024年7月19日(金)～7月25日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 夜空にかがやく星々の記憶 ～星空写真の世界へようこそ!～	2024年7月26日(金)～8月15日(木)
“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展2024	2024年8月17日(土)～8月21日(水)
第8回 日本風景写真協会選抜展「四季のいる」	2024年8月23日(金)～8月29日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 平井佑之介写真展「いのちの旅 ―ふるさとの川をめざすサケ―」―東北の川でいとなまれる生命の物語―	2024年8月23日(金)～9月12日(木)
「富士フィルムフォトコンテスト」歴代(第59回～第62回)グランプリ作品展	2024年8月23日(金)～9月5日(木)
2024 全日本読売写真クラブ展	2024年8月30日(金)～9月5日(木)
丸の内写真倶楽部展	2024年9月6日(金)～9月12日(木)
「富士フィルムフォトコンテスト」特別企画「組写真部門」「アンダー39部門」上位入賞作品展(第62回分)	2024年9月6日(金)～9月19日(木)
宮本宏明写真展「赤石岳 ～3,000m峰の四季をめぐる～」	2024年9月13日(金)～9月19日(木)
泊和幸写真展「里山の宇宙(くうかん)・躍動するキタキツネ」	2024年9月13日(金)～9月19日(木)
PREMIUM PRINTで飾る「第4回フォトアドバイス写真展」	2024年9月13日(金)～10月3日(木)
全日写連フォトフェスティバル2024「カラーとモノクロ 表現の競演」第56回カラーフェア 第23回全日本モノクロ写真展	2024年9月20日(金)～9月26日(木)
松本伸夫写真展「工場街の猫景色」	2024年9月20日(金)～10月10日(木)
四季会写真展「第36回 四季彩美」	2024年9月27日(金)～10月3日(木)
日比野幸一写真展「B面の世界」	2024年9月27日(金)～10月3日(木)
第43回 ハッセルブラッドフォトクラブ写真展	2024年10月4日(金)～10月10日(木)

※緑字は当社が主催・協力する企画展	
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 中谷吉隆写真展「125年の絆―日本で活躍する中南米の日系人の今日―」・「蒼氓60年―南米の日本人―」	2024年10月4日(金)～10月17日(木)
2024富士フィルム営業写真コンテスト 入賞作品発表展	2024年10月11日(金)～10月17日(木)
FUJIFILM GFXシリーズ ミラーレスデジタルカメラ「FUJIFILM GFX100 Ⅱ」NEXT STAGE OF LARGE FORMAT「GFX」展	2024年10月11日(金)～10月17日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 富士フィルムグループ 創立90周年記念 企画展 写楽祭(しゃらくさい)!― 日本の写真集 1950～70年代	2024年10月18日(金)～11月7日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 吉岡泰良写真展「Boundary(バウンダリー) ―クリケットから広がる世界―	2024年10月18日(金)～11月7日(木)
富士フィルム 企画写真展 GFX Challenge Grant Program 2023 ～Make Your Next Great Image～	2024年11月8日(金)～11月28日(木)
東京デイズニールゾート®・フォトグラフィープロジェクト 「イマジニング・ザ・マジック」写真展 “10イヤーズ・オブ・ドリームス&マジック”	2024年11月29日(金)～12月19日(木)
富士フィルム 企画写真展 VR PHOTO EXHIBITION Vol.3	2024年11月29日(金)～12月12日(木)
日蘭協会70周年記念写真展 ～会員たちが見た日蘭の物語～	2024年12月13日(金)～12月26日(木)
第5回 TOKYO D.K.F 写真展「東京の景」	2024年12月20日(金)～12月26日(木)
2024年 日本雑誌写真記者会写真展	2024年12月20日(金)～12月26日(木)
FUJIFILM Xシリーズ作品展&丸の内写真教室作品展	2024年12月20日(金)～12月26日(木)
「第20回美しい風景写真100人展」【風景写真Xtension展】	2025年1月6日(月)～1月16日(木)
2024年 第19回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展	2025年1月17日(金)～1月23日(木)
「天・地・間」	2025年1月17日(金)～1月23日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 黒岩正和写真展「島魂」―TOUKON―	2025年1月17日(金)～2月6日(木)
富士フィルムグループスポーツ企画展 富士フィルム海老名Minerva AFC 写真展	2025年1月17日(金)～2月6日(木)
富士フィルム 企画写真展 KG+ Discovery Award 2024 受賞作品 青木 弘 写真展 「JUHEISEN 樹平線」～中央アフリカ共和国より愛を込めて～	2025年1月24日(金)～2月6日(木)
リタ・アレス写真展「うつくしい地下鉄」	2025年1月24日(金)～1月30日(木)
「建コンフォト大賞」写真展 ～暮らしの中の土木～	2025年1月31日(金)～2月6日(木)
菊地晴夫写真展「美瑛・富良野40年 日本で最もフォトジェニックな大地」	2025年2月7日(金)～2月13日(木)
目崎之教写真展「beyond the sea 海の彼方に想ふ」	2025年2月7日(金)～2月13日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 幕末明治を写した記録写真 Photographs of the Late Edo / Early Meiji Period ～フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 収蔵品より～	2025年2月7日(金)～3月6日(木)
「麻布未来写真館」パネル展 ～次世代へつなぐ麻布の記憶～	2025年2月7日(金)～3月6日(木)
K-Labo TEN「10周年写真展」	2025年2月14日(金)～2月20日(木)
フォトクラブ写楽写真展「美しい彩りのとき」	2025年2月14日(金)～2月20日(木)
土屋 幸子 写真展「Gift of Nature ～大雪山の動物たち～」	2025年2月21日(金)～2月27日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 沖 昌之写真展「これネコ それネコ?」	2025年2月21日(金)～3月6日(木)
山岳写真展「悠久の峰2025」	2025年2月28日(金)～3月6日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【写真家たちの新しい物語】 Pedro Gomes写真展「The Art of Surf Photography」	2025年3月7日(金)～3月20日(木・祝)
「PHOTOGRAPHY / DESIGN: STOCKHOLM - TOKYO」東京工芸大学芸術学部 x Fotoskolan STHLM, Sweden共同企画展	2025年3月7日(金)～ 3月27日(木)
富士フィルムフォトサロン若手写真家応援プロジェクト【ポートフォリオレビュー/アワード 2024】	2025年3月21日(金)～ 4月10日(木)
第46回 よみうり写真大賞 入賞作品発表展	2025年3月7日(金)～ 3月13日(木)
FUJIFILM SQUARE 企画写真展 富士フィルムグループ創立90周年記念 富士フィルムの歴史を築いたフィルム&カメラ	2025年3月7日(金)～ 3月27日(木)
吉良俊一写真展「もうひとつの影」	2025年3月14日(金)～3月20日(木・祝)

■写真歴史博物館／開催写真展 計5本

FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 アンセル・アダムス作品展「ポートフォリオⅣ:偉大なる啓示」	2024年3月28日(木)～5月22日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 有田泰而(ありたたいじ)「First Born」 ― 家族と遊ぶ時間(とき) ―	2024年5月23日(木)～8月28日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 ロベール・ドアンー写真展 第一部「パリ郊外 ～城壁の外側～」	2024年8月29日(木)～10月30日(水)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 ロベール・ドアンー写真展 第二部「“永遠の3秒”の原点」	2024年10月31日(木)～12月26日(木)
FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館 企画写真展 立木義浩写真展「舌出し天使 CONTACT SHEETS - 眼差しの軌跡 -」	2025年1月6日(月)～3月26日(水)

■来館実績

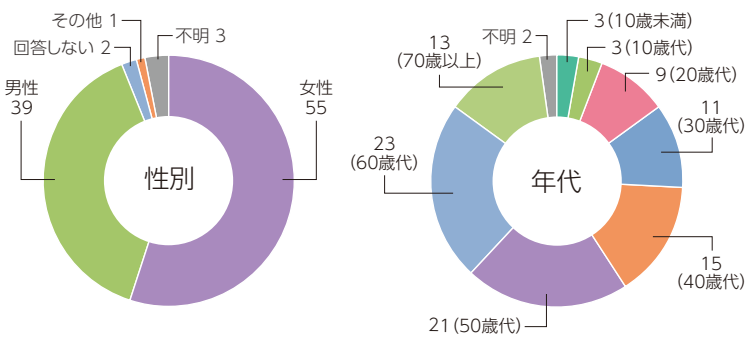
来館者数

※年末年始を除く稼働日数354日の来館者

390,831人
1日平均
1,104人

来館者属性

※自社アンケート調査による。(回答人数9,379人、グラフの単位は%)



写真展の開催回数

80本

▶当社が主催・協力する企画展 38本 ▶公募展 42本

若手写真家応援プロジェクト8本、
写真歴史博物館の企画写真展5本、
当社が協力の写真展25本を含む、合計38本を開催。

ギャラリートーク・トークイベントなど、鑑賞サポート活動の参加人数

6,611人 511回

写真展は「撮った人＝出展者」の気持ちを「見た人＝鑑賞者」に伝える場です。フジフィルム スクエアは、写真展を通じてより多くの「人」と「人」の心をつなぐために、さまざまな鑑賞サポート活動を行っています。2024年度は合計6,611人の方にご参加いただきました。



▶ギャラリートーク

写真展の会期中、写真展会場内で作品解説を行っています。出展者ご自身に解説いただく機会も多く、出展者と鑑賞者の交流の場ともなっています。

	開催回数	参加人数
富士フィルムフォトサロンでの企画写真展	59回	2,261人
公募展	52回	1,329人
写真歴史博物館	6回	287人

▶トークイベント、体験、ポートフォリオレビュー

写真に親しむ機会を幅広くご提供するために、写真展に合わせたイベントを企画開催しています。

	開催回数	参加人数
トークイベント	5回	625人
体験	1回	70人
ポートフォリオレビュー	2回	60人

▶写真歴史博物館コンシェルジュツアー

富士フィルムで写真製品の研究・開発・技術サポートに長年携わったOBがコンシェルジュとして、写真の歴史と企画展について分かりやすく解説しています。	参加人数
写真の歴史と企画展についての解説ツアー	2024年4月1日～2025年3月31日 1,408人

Web公開動画

フジフィルム スクエア Webサイトで公開した動画本数。

23本

▶総再生回数

25,335回

主要交通広告

日比谷線・六本木駅、日比谷線・恵比寿駅、千代田線・乃木坂駅、都営大江戸線・青山一丁目駅、東京ミッドタウン

自社媒体

・フジフィルム スクエア
Webサイトユーザー数：1,191,281人
・Facebook、X (旧Twitter) 投稿件数：394件

主要メディア掲載

中央紙・地方紙：朝日新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞、秋田魁新報、中日新聞、電化新聞、東奥日報、徳島新聞、日刊ゲンダイ／雑誌：月刊ギャラリー、週刊文春／カメラ紙(誌)：隔月刊風景写真、CAPA、デジタルカメラマガジン、フォトコン／ラジオ：Tokyo Midtown presents The Lifestyle MUSEUM／Web：朝日新聞デジタル、antenna、MdN、東洋経済オンライン、PRESIDENT Online、毎日新聞デジタル、Yahoo!ニュース、読売新聞オンライン、47NEWS、livedoor ニュース

■来館者、出展者から寄せられた声

フジフィルム スクエアには来館者からアンケートで感動の声が多く寄せられます。また、出展者からも展示を通して発見したことや、来館者との交流についての感想など、たくさん声をいただきます。このように、フジフィルム スクエアで写真を通じて「こころ彩られ」、紡ぎ出された言葉の一部をご紹介します。
※お寄せいただいた声と写真の被写体の方は関係ありません。

《来館者の声》



初めて訪れましたが、作品の素晴らしさに感動し、また圧倒されました。これがオリジナルプリントの力なんですね。写真でこんなに感動できるものなんだと感じました。

展示作品に心動かれ、身近な人を撮りたい気持ちになりました。改めて写真の力について考えさせられました。

コンシェルジュの方が丁寧に説明してくださり、とても楽しいひと時になりました。ありがとうございました。

星についての写真展では、解説がイラスト入りで小学生にも分かりやすく、子どもの勉強にもなる素晴らしい展示でした。

写真家の方のトークショーがとても楽しく、作品をより身近に感じることができました。このようなイベントをまたやってほしいです。

個性的な写真、素晴らしい写真に圧倒されました。それぞれの写真にまつわるストーリーも聞けて、より興味深く見ることができました。

素晴らしい作品ばかりで感動しました。友人にも伝えたいです。また見に来ます。

来るたびに新しい企画展が開催されているので、いつも新鮮で飽きません。

普段見ることのできない世界を見せてくれるとてもよい写真展ばかりです。

スタッフの方も親切で、富士フィルムやカメラの歴史がとてもよく分かりました。素敵な時間を過ごせました。

フィルム写真の良さを感じることができた展示でした。作品1点1点がどれも印象的で心ひかれました。

銀写真プリントから撮影当時の空気を感じることができ、まるで撮影に立ち会っているかのような感覚でした。



《出展者の声》

これまで自分一人で作品づくりをしてきましたが、今回は展示のキャプションづくり、会場内やリーフレットのデザイン、銀写真プリントの高いクオリティなど、大勢の方に支えていただきました。多くの方がチームとなって写真展を作り上げる過程を学ぶことができる、貴重な機会でした。

多くのお客さまと話す中で、写真を通して自分が伝えたいことや思いが明確になり、「自分の言葉」ができていく過程を実感できました。先人の方々もこうして写真や言葉に重みを増していったのかなと感じ、さらに写真が好きになりました。

初めての写真展で右も左も分からない中、テーマ決めからプリントまで手厚くサポートをいただき、段階を踏みながら写真展開催を経験することができました。この経験は今後写真家としての活動の土台になると感じています。

今回の展示は、人生のモチベーションにつながりました。フジフィルム スクエアで再び展示できることを目標に、これからも作品を制作し、発表を続けたいと思います。そして多くの人に写真を撮る楽しみ、撮り続ける喜びを伝えたいです。

展示するだけの一方通行の発信ではなく、ご来場いただいた方との交流や、見てくださっている方の反応をその場で感じることができました。お客さまとコミュニケーションができるのはフジフィルム スクエアだからこそです。

企画からレイアウト・デザイン・構成と、展示を通して多くを学ぶことができました。展示以前は撮影にばかり力を入れてきましたが、撮影をして終わりではなく、多くの方の心に届く写真とは何か、どうすると効果的なキャプションが作れるのかなど、展示を意識した視点を持つことができました。

ギャラリートークを繰り返すことで、改めて自分の写真展にかけたい思いや被写体に対する思い、自分の中で大事にしていることへの理解が深まりました。お客さまとの距離も近く、会場内が終始和やかな空気で包まれていたのでスムーズにトークをすることができました。

プロフェッショナルの方々と一緒に写真展の準備を進める中で、客観的な目線で私自身の「強み」を指摘してもらうことができ、その強みを生かした作品のまとめ方や、見せ方を学ぶことができました。

富士フィルムのプリント技術により作品を被写体の実寸大にまで大きくプリントすることで、見ている人に没入感を与える臨場感ある展示ができました。大変感動しました。

六本木という土地柄、外国人の方の来場も多く、また、懐かしい人との再会や新しいつながりがたくさん生まれました。国籍を問わずいろいろな方と交流できたのも良かったです。

ギャラリートークは非常に緊張しましたが、お客さまがたくさん質問してくださり、自分の作品について深く掘り下げて話すことができました。回を重ねるごとに作品に込めた思いをより深く伝えられるようになった気がします。

《従業員の声》

ワクワクするような写真展は、富士フィルムグループのパーパスである「地球上の笑顔の回数を増やしていく。」につながっていると感じます。

写真に詳しくない私でも知っている著名な写真家の作品が収蔵・展示されているのを見ると、富士フィルムグループの従業員として誇りに思います。

毎回テーマも素晴らしく、社会貢献につながる優れた展示ばかりだと思います。娘が大きくなったら見せたいです。

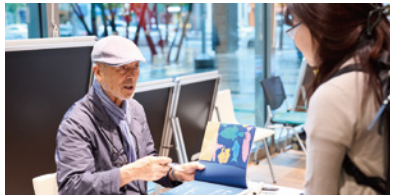
無料で自由研究イベントやギャラリートークに参加できる写真展もあり、老若男女問わず楽しめます。

継続的に写真展を開催することで、写真文化に貢献するという富士フィルムの姿勢を伝えることができていると感じます。

いつも趣向を凝らした企画展を開催し、写真文化や写真の魅力を発信していると思います。今後の企画も楽しみです。

写真をスマートフォンや雑誌で手軽に見るのもいいですが、高画質な銀写真プリントで大きな展示作品を見るのもいいですね。じっくり細部まで見るとまた違った魅力に気づかれます。

未来の才能を見い出し、全ての写真家の方に機会を提供する取り組みは、写真業界の発展に大きく貢献していると考えます。



- ・本活動報告書の2024年度とは2024年4月1日～2025年3月31日を指します。
- ・本活動報告書に掲載されている「主要メディア掲載」および「ご来館者数」のデータは自社調査に基づくものです。
- ・「来館者数」は写真展期間中のフジフィルム スクエア全体のご来館者数の合計です。
- ・「来館者の声」および「来館者属性」は、2024年度に開催された写真展期間（2024年4月1日～2025年3月31日）に実施された自社アンケート調査に基づくものです。
- ・本活動報告書では、銀を含む化学薬品をゼラチンに溶かして塗布した写真用紙に、ネガフィルムなどを通して露光し、現像処理して得られる写真プリントのことを「銀写真プリント※」と表記しています。
※フィルム・デジタルカメラ画像を写真店やラボに依頼してプリントする、従来からの「写真（銀塩方式）」プリントを示す呼称
- ・本活動報告書に掲載されている写真は、新型コロナウイルス感染対策を十分に講じたうえで撮影しています。
- ・年間を通じた写真展運営の協力会社は、下記のとおりです。
展示作業：株式会社フレームマン
展示物・告知物制作：富士フィルムイメージングシステムズ株式会社
運営協力：富士フィルムビジネスエキスパート株式会社



世界中の人々の笑顔を見つめてきた富士フィルムグループは、これからも幅広い事業領域で人々に寄り添い、従業員一人ひとりが「アスピレーション（志）」を持って、このグループパーパスの実現を目指すことで、地球上の笑顔の回数を増やしていきます。



フジフィルム スクエア 2024年度 活動報告書

発行日：2025年7月

発行・編集：富士フィルム株式会社

コーポレートコミュニケーション部 宣伝部

〒107-0052 東京都港区赤坂9-7-3

発行者：松島大泉

制作：富士フィルムビジネスエキスパート株式会社

企画・デザイン：株式会社ラジアン

印刷：株式会社ジョーメイ

©富士フィルム株式会社 禁無断転載

